



文化財愛護
シンボルマーク

KU NICH DA
九 日 田 遺 跡
発掘調査報告書



平成 12 年 5 月

島根県松江市教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成10年度（1998）において松江市土木課から委託を受けて松江市教育委員会が実施した市道大井朝駒線改良工事に伴う「九日田（くにちだ）遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の組織は以下のとおりである。

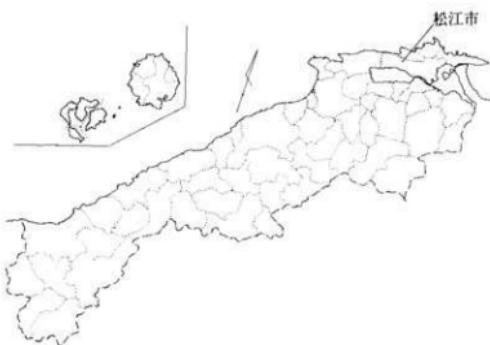
事業主体者	松江市教育委員会	
事務局	教育長 原 敏	文化財室長 岡崎雄二郎
調査者	調査担当者 岡崎雄二郎	調査員 成瀬 和久（文化財室副主任）
嘱託員	嘱託員 山根 克彦	嘱託員 近藤 雅彦
3. 調査の実施にあたっては、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表します。

萩村喜則（島根大学生物資源科学生物科学科講師）、柳浦俊一（島根県教育委員会文化財課文化財保護主事）、千葉豊（京都大学大学院文学研究科助手）
4. 平成10年度島根県海外技術研修員として、中国・寧夏回族自治区銀川市から松江市教委文化財室に文化財保護の研修にきておられた朱存世氏（当時西夏陵区管理処勤務）には発掘調査作業を体験していただいた。

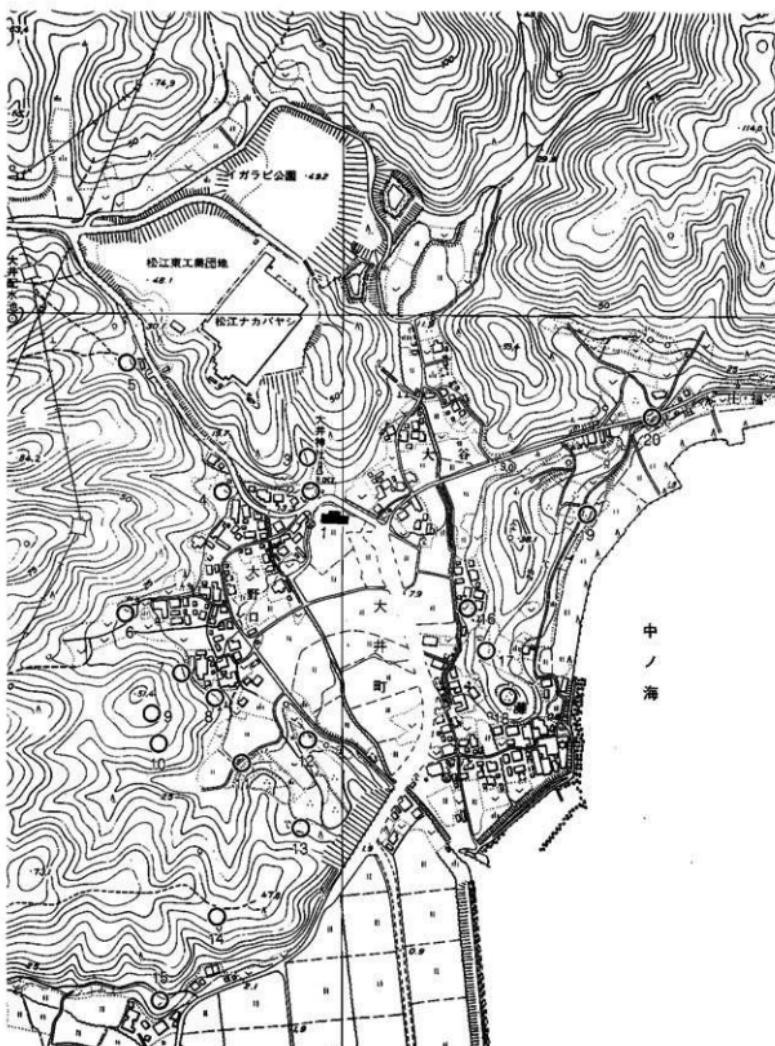
記して感謝の意を表し、日中文化交流が一層深まっていくことを期待します。
5. 古野毅氏（島根大学総合理工学部材料プロセス工学科教授：材料工学）には、出土した木製品及び立木の樹種鑑定をお願いし、付編として掲載した。この鑑定に供する観察用プレパラートの作成については、文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。
6. 出土遺物は、松江市教育委員会生涯学習課文化財室で保管している。
7. 遺物の整理、実測及び清書は、岡崎、成瀬、飯塚康行（文化財室副主任）、山根、近藤が行い、拓本は荻野哲一（文化財室嘱託員）、写真撮影は岡崎、執筆・編集は岡崎、成瀬が行った。なお、遺物の整理については、瀬古涼子（財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財調査係長）の援助を受けた。

目 次

I 調査に至る経緯	5
II 周辺の歴史的環境	5
III 発掘調査の概要	6
1. 堆積土層と出土遺物	6
2. 地山面の遺構と出土遺物	18
IV 遺物と遺構の検討	44
1. 遺物の検討	44
(1) 土器類	44
(2) 石器	45
(3) 木製品	46
(4) 自然遺物	46
2. 遺構の検討	47
(1)貯蔵穴について	47
V ま と め	48
VI 付篇 自然科学分析 九日田遺跡出土木製品樹種鑑定調査報告書	55



第1図 九日田遺跡位置図 S=1/50,000を縮小



第2図 周辺の遺跡 S=1/5,000を縮小

- 1. 九日田遺跡 2. 大井の池遺跡 3. 大井神社境内遺跡 4. 井ノ奥遺跡 5. 山ノ奥遺跡
- 6. 寺尾窯跡 7~9. 大井古墳群 10. 大井横穴墓群 11. 網谷窯跡 12. 山巻古墳
- 13. 山巻遺跡 14. 山巻第2古墳 15. ババタケ窯跡 16. 大井向山古墳 17. 井崎遺跡
- 18. イズキ山古墳群 19. ジャバミ遺跡 20. 山津窯跡

I 調査に至る経緯

松江市都市建設部土木課では、市内大井町地内を通過する市道大井朝駒線の狭隘を解消するため、大井神社前付近の道路改良工事を計画し、平成10年1月6日付、土第1059号で道路の改築にかかる埋蔵文化財包蔵地の有無の照会があった。

計画地域周辺には、以前から須恵器の窯跡や土器片を包含する散布地などの周知の遺跡が知られていたので、事前に確認のための試掘調査が必要である旨、平成10年1月13日付、松教生第3-386号で土木課宛回答した。

試掘調査は、平成10年2月16日にルート内の水田地に5ヵ所のトレンチを設け重機によって掘り下げ観察した。その結果、各トレンチにおいて古墳時代の須恵器片と陶磁器片が出土し、周辺地から流入した遺物が堆積した散布地であることが確認された。

この遺跡を、土地の小字をとって「九日田遺跡」と命名する一方、工事着手前に全面発掘調査が必要である旨、平成10年2月24日付、松教生第3-386号で土木課宛回答した。

本格発掘調査は、平成10年8月17日から着手し、同年12月18日まで計52日間を要して実施した。

期間中の11月8日（日）には、現地説明会を開催し40名の参加者があった。又、12月9日（水）には、地元朝駒小学校（校長山根勇当時）の5年生、6年生合わせて49名が発掘を体験し、堆積土層中から移植ゴテなどで須恵器や黒曜石の破片を探取したり、縄文時代の食生活に関する話を聞いたりして大昔の暮らしについて理解を深めた。

II 周辺の歴史的環境

周辺には、古墳時代以降の遺跡が多数あるので、大井の集落周辺だけの遺跡を取り上げると以下の通りである。

- | | |
|------------|---|
| 1 九日田遺跡 | 縄文土器、どんぐり類の貯蔵穴、須恵器、土師器、石器、木製品 |
| 2 大井の池遺跡 | 須恵器片、湧水池 |
| 3 大井神社境内遺跡 | 須恵器片、土馬が出土 |
| 4 井ノ奥遺跡 | 須恵器片の散布する畑 |
| 5 山ノ奥遺跡 | 須恵器片の散布する畑 |
| 6 寺尾窯跡 | 6~7世紀代の須恵器片、窯壁塊が広範囲に散布する畑 |
| 7~9 大井古墳群 | 3基、石棺あり |
| 10 大井横穴墓群 | 南A群11穴以上、北B群2穴以上 |
| 11 堀谷窯跡 | 3基あり、最奥部の窯跡は道路法向に焼成室の断面が露出し出土1期の須恵器蓋坏、壺、甕出土 |

- 12 山巻古墳 箱式石棺、山雲3期の須恵器蓋坏、壺大量に副葬
 13 山巻遺跡 須恵器片、土師器片の散布する山林
 14 山巻第2古墳 方墳、石棺材散乱（12×10、高2m）
 15 ババタケ窯跡 窯壁塊あり、出雲3期～奈良期の須恵器片の散布する畑
 16 大井向山古墳 石棺式石室、墳形不明
 17 井崎遺跡 須恵器片広範囲に散布
 18 イズキ山古墳群 墳形不明、5基、横穴式石室、組合せ石棺あり
 19 ジャバミ遺跡 須恵器片散布
 20 山津窯跡 出雲4期～奈良期の須恵器片の散布する畑、県道で寸断

このように大井地区では、5世紀代から奈良時代に至る窯跡が集中し、長期にわたり須恵器生産が盛行しており、古代の集落跡と考えられる須恵器片の散布地の古墳、横穴墓も窯業集団と強い関係にあるものと考えられる。今岡山田遺跡の発見で断片的ではあるが、縄文後期・弥生前・中期、古墳時代前～中期の土器が新たに確認されたことは少なくとも縄文時代後期以降、住居を変えながら生活の場がほぼ続いていることを示しているのではないだろうか。

III 発掘調査の概要

調査区は、道路予定地は南北幅10m、東西長さ約40m、大井公民館移築予定地は南北幅10m、東西長さ15m、計約550m²の調査区を設定し、耕作土は重機で除却し、以下の堆積上層は地山面まで人力で掘削した。

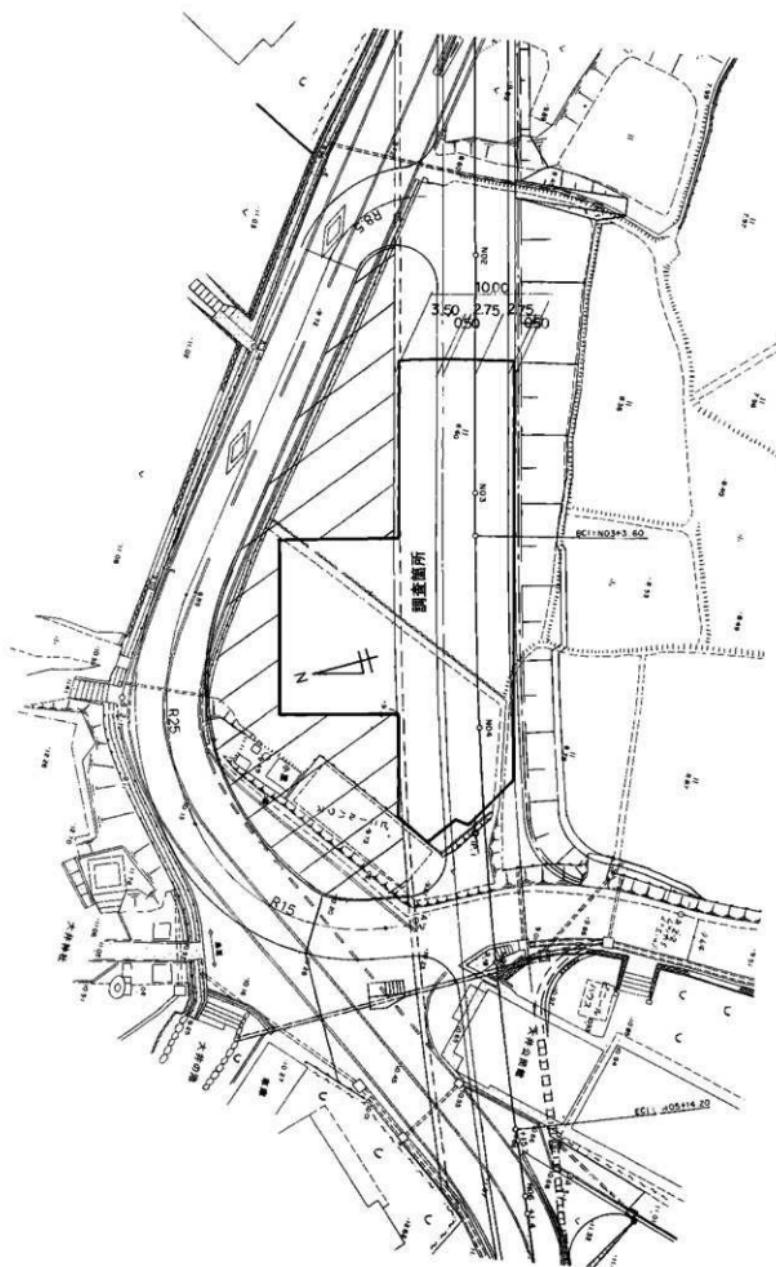
1. 堆積土層と出土遺物

調査区の北側は薄く、C-1区の北西部では耕作土の下はすぐに40cmほどで地山面に達する。北から南へ次第に上層は厚くなり、A-1区からB-3区に至るラインでは耕作土の下層は、2層ほどの疊層が認められる。最南端では3～4層の疊・砂疊層があり、耕作土層以下最下層の疊層や地山面である疊混じり粘性土の界面まで、遺物が認められた。出土遺物は、古墳時代前期のいわゆる古式土師器の壺、器台の破片、古墳時代から奈良時代に至る須恵器の壺、壺、高壺、蓋坏、器台の破片、土師器の壺、壺、高壺の破片が大半で、他に縄文時代の鉢、磨製石斧、弥生時代の壺、甕、打製石器類、須恵質の土馬の破片や黒曜石の破片、黒曜石製の石鏃、すり石、窯壁塊、土鍬、石鍬なども認められた。

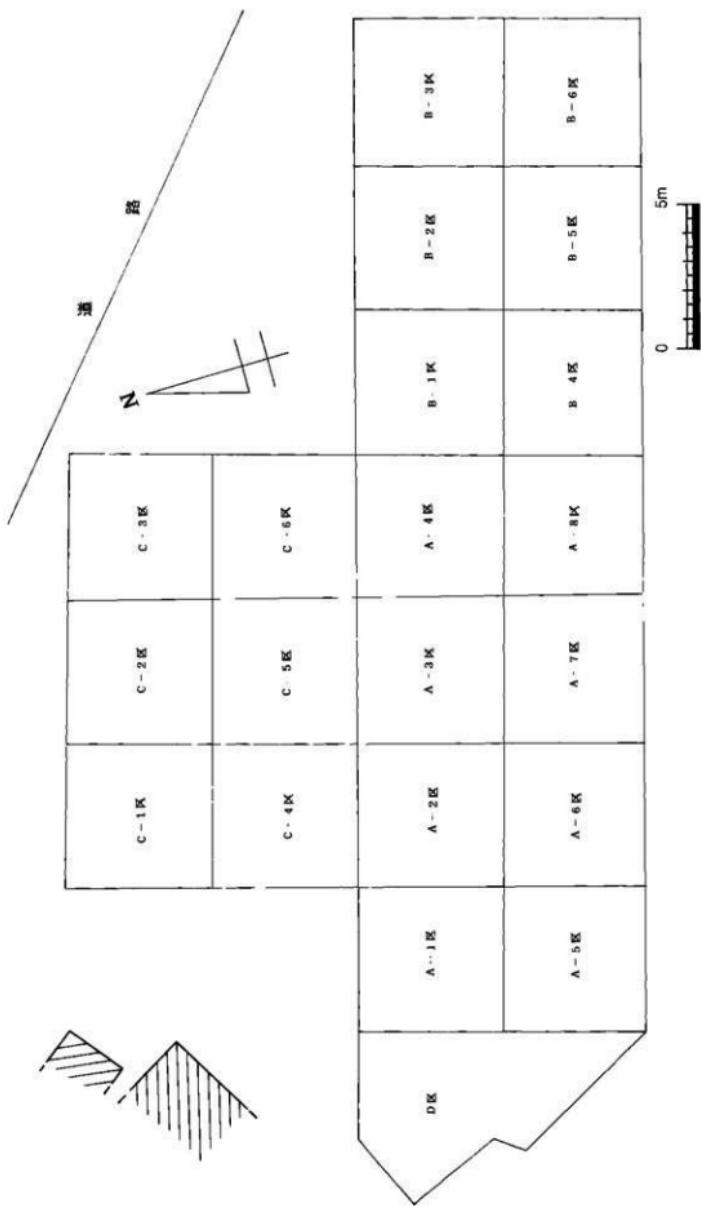
土層が基本的に疊や砂疊で構成されていることと、最下層や地山面からは、本遺跡では最も新しい時代である平安時代の土器が含まれていたことから、これらの堆積上層は、平安時代まで数回にわたって本遺跡周辺の山麓にあった居住区が大雨や洪水で押し流され本遺跡周辺に堆積したものと考えられる。

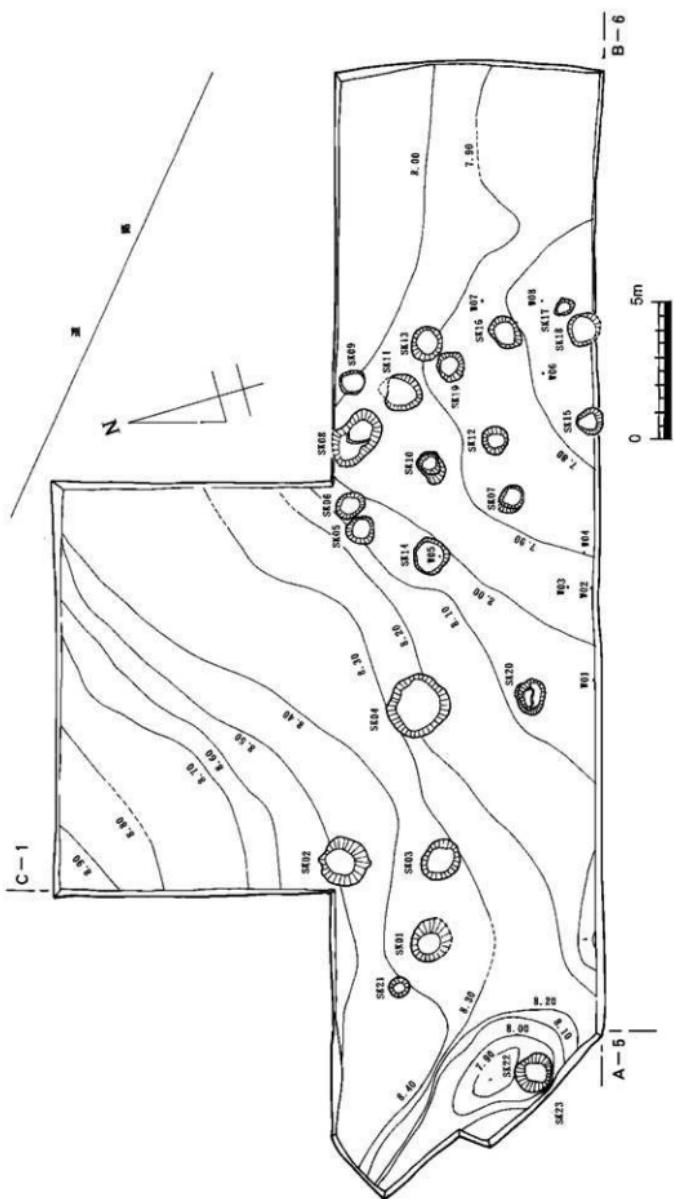
縄文、弥生土器、黒曜石の破片、黒曜石製の石鏃、すり石、窯壁塊も確認されたことから、周辺

第3図 市道大井朝霧線と九日田遺跡調査箇所 S=1/250

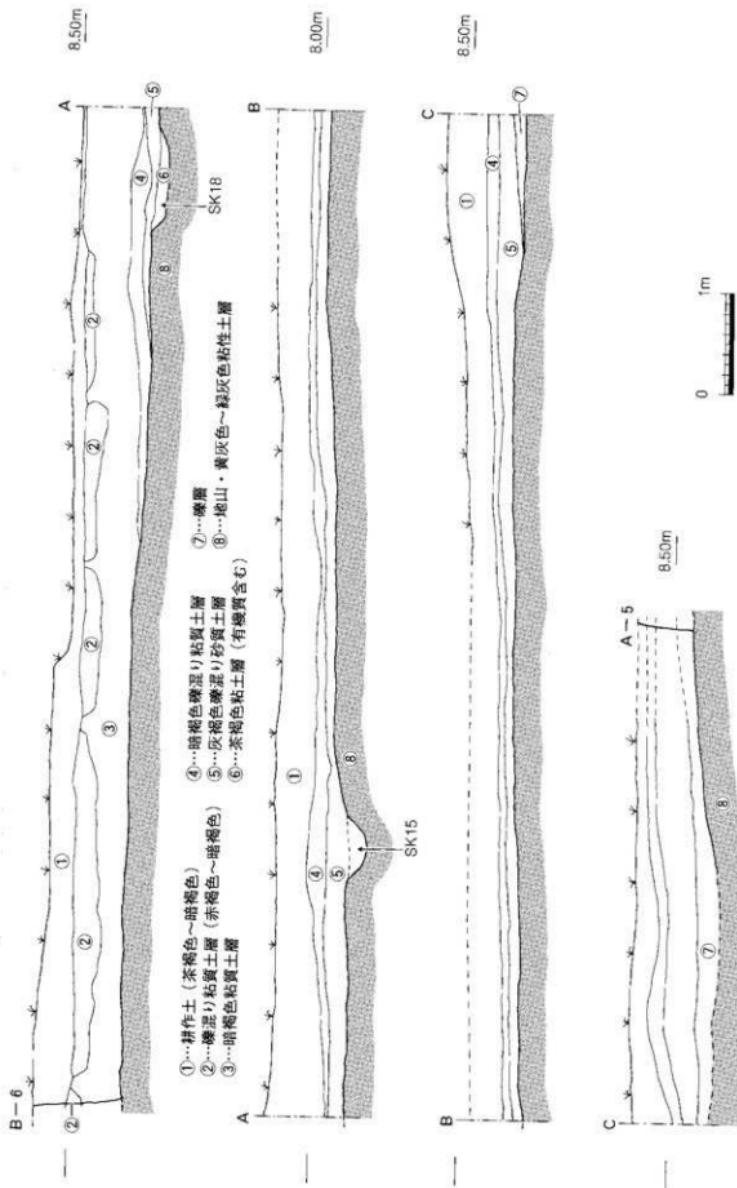


第4図 九日田遺跡発掘調査区設定図

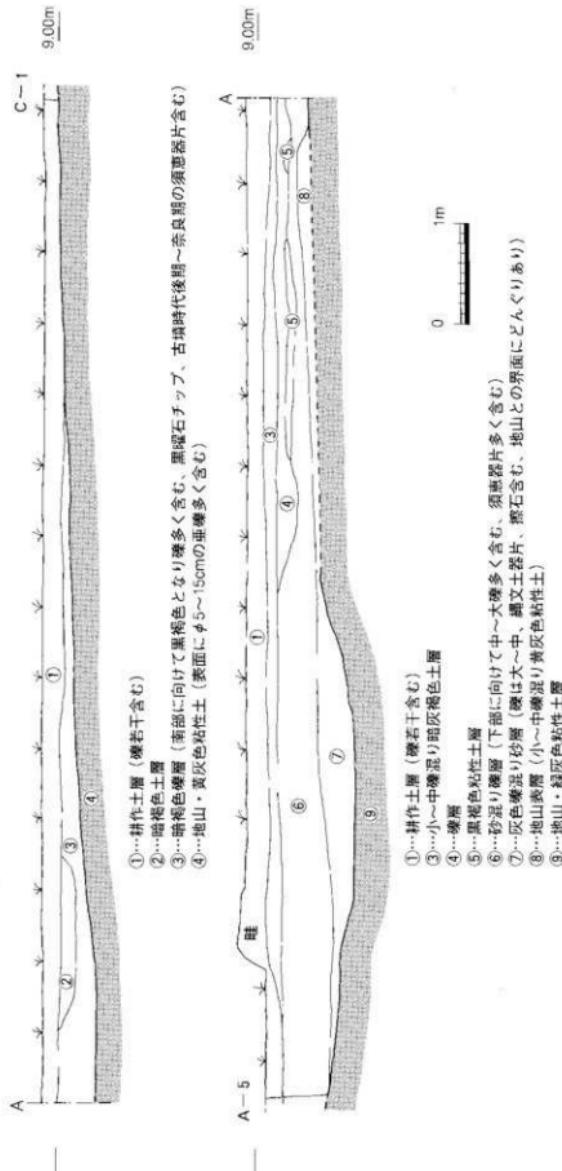




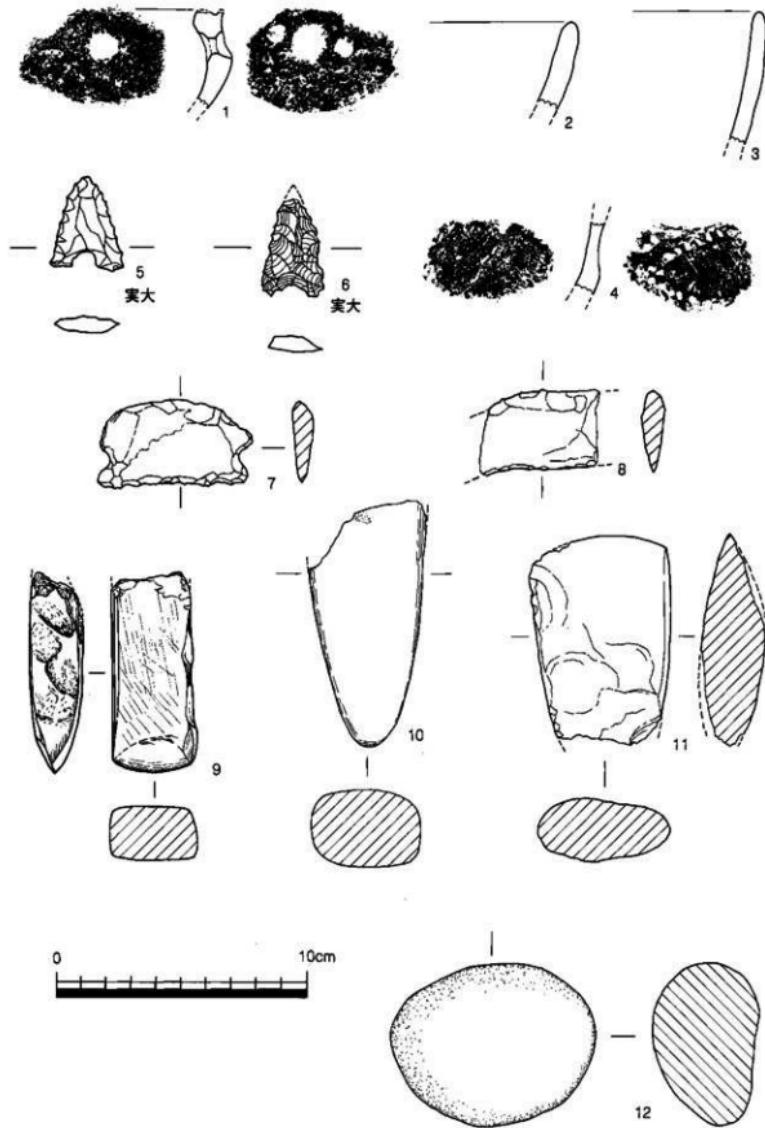
第5図 九日田漁業振興調査成果平面図



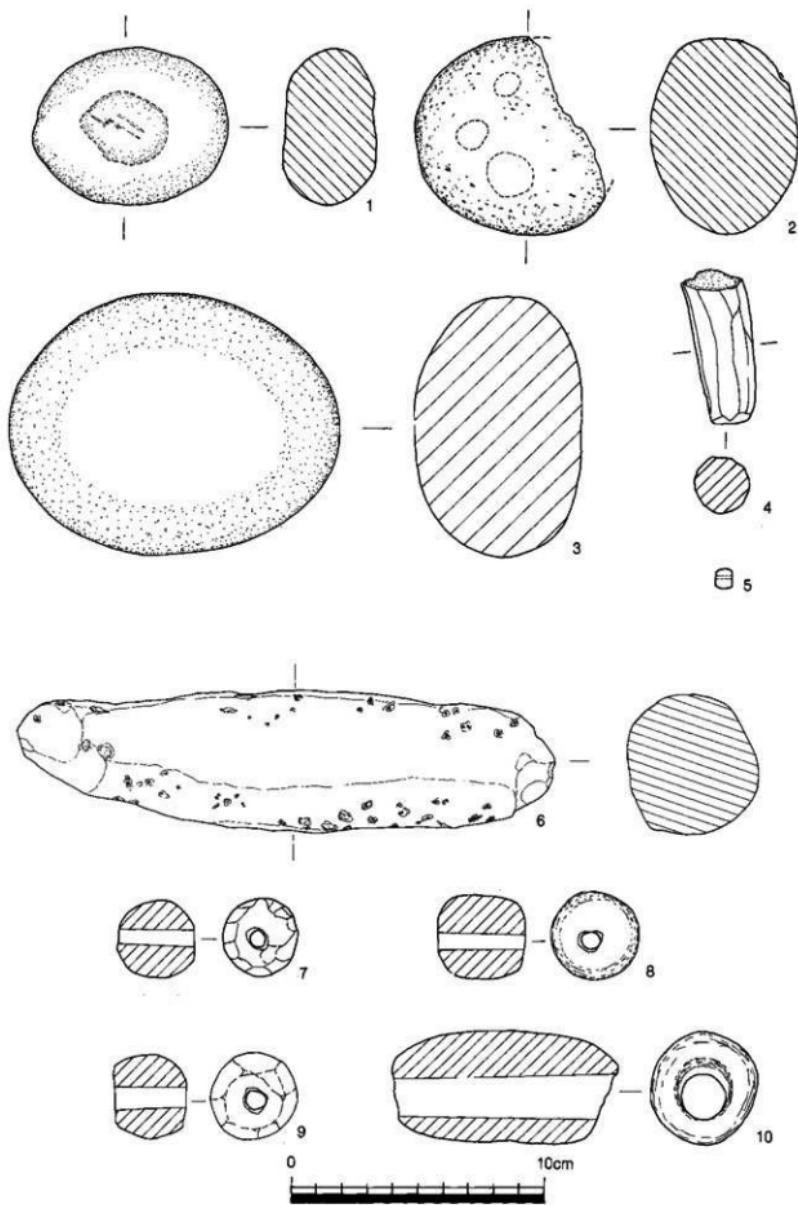
第6図 東西(B-6→A-5) 土壌断面図



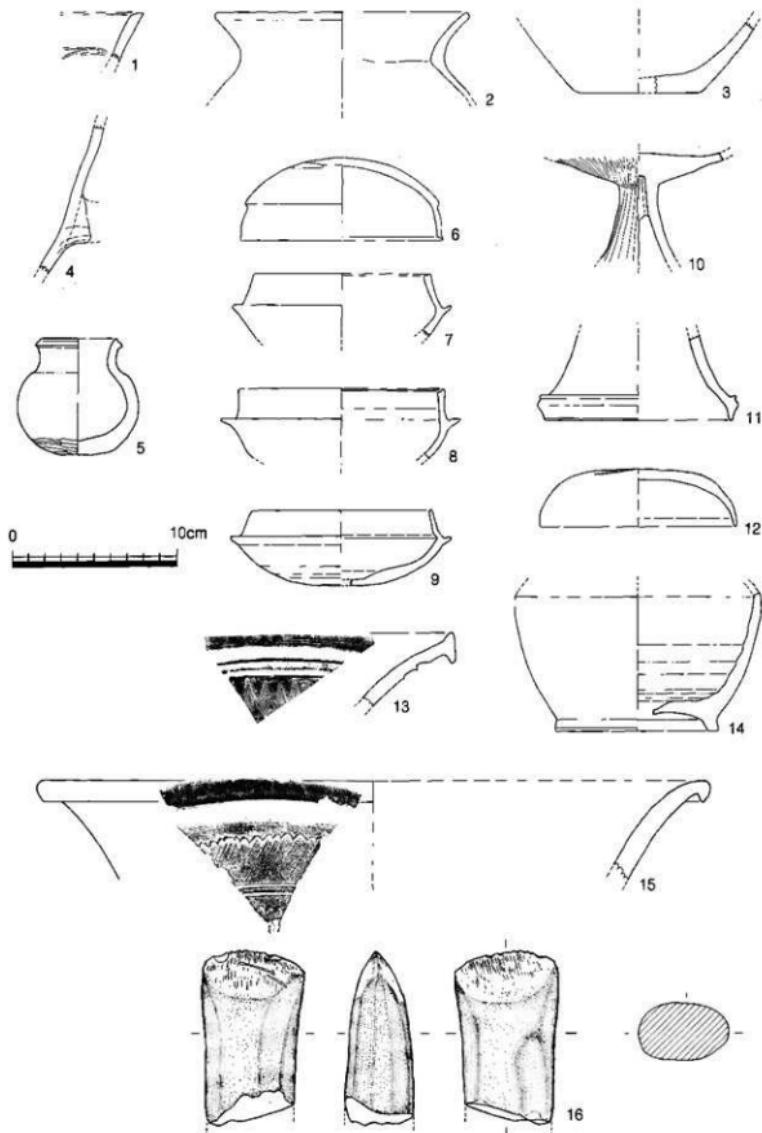
第7図 南北 (C-1→A-5) 土層断面図



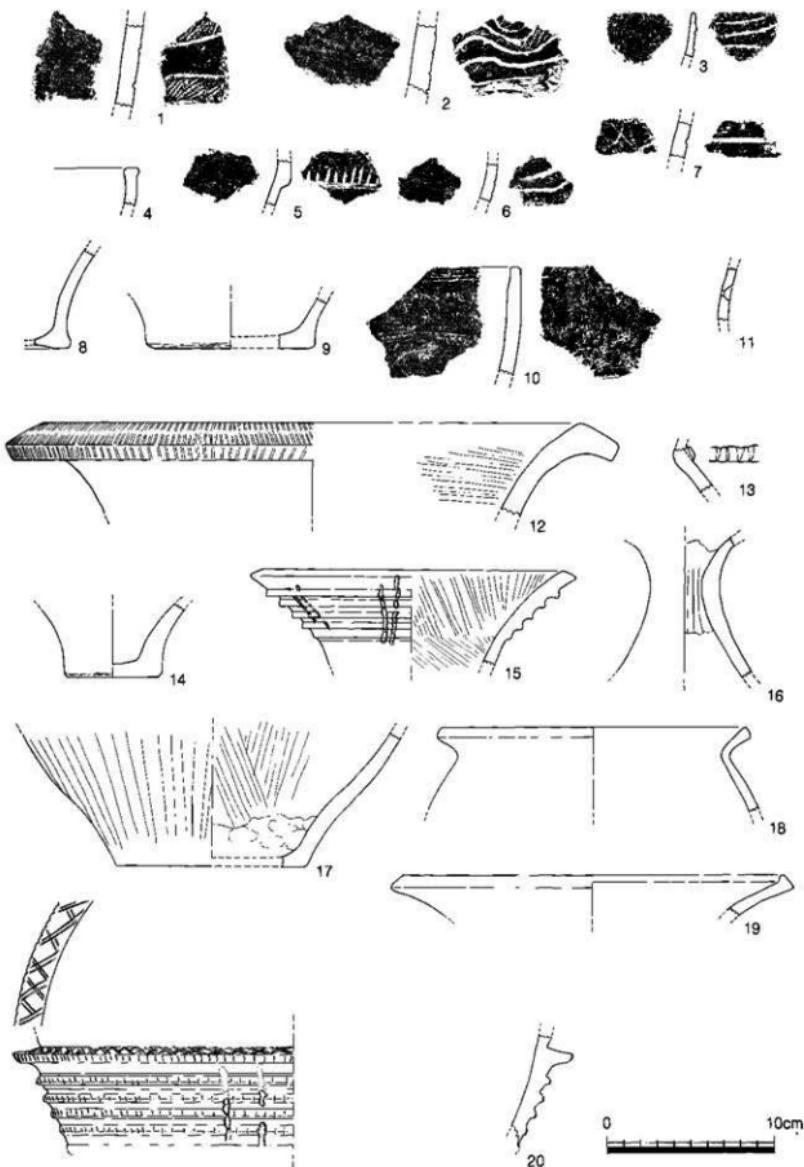
第8図 A区出土遺物実測図(1)



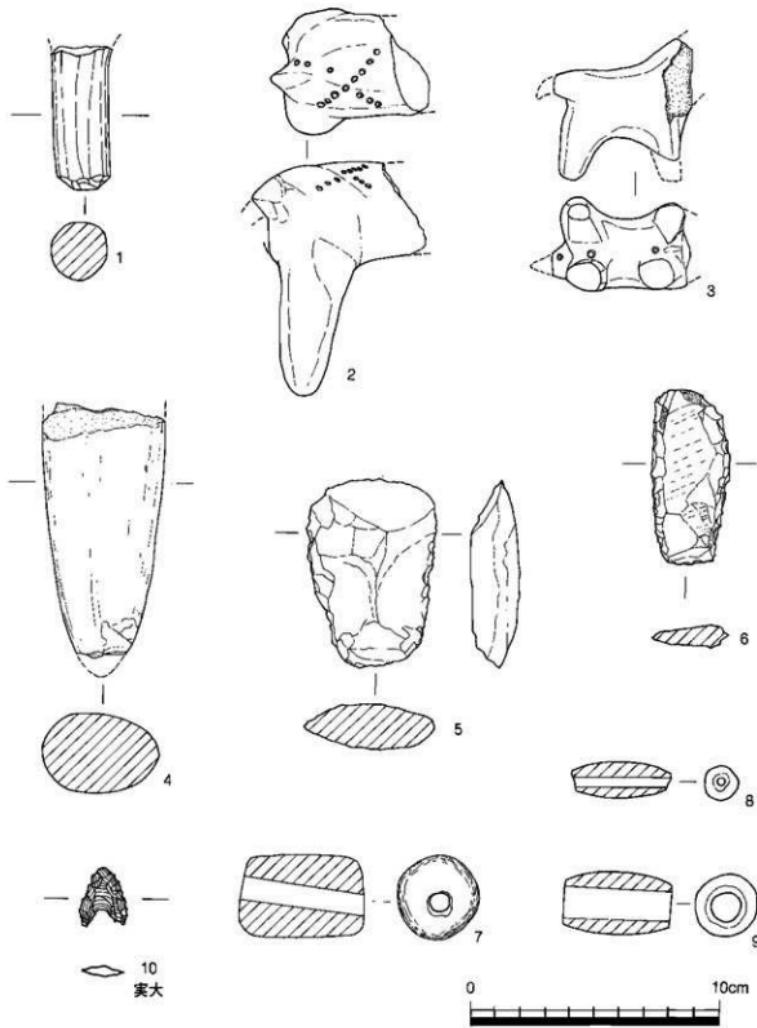
第9図 A区出土遺物実測図(2)



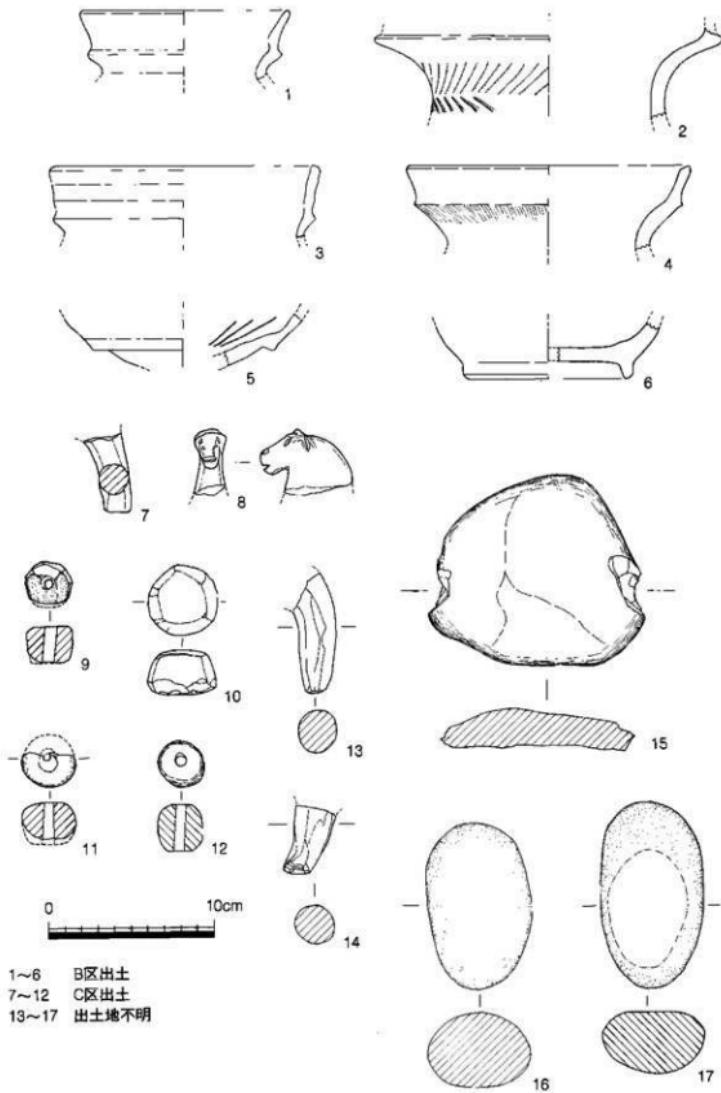
第10図 A区出土遺物実測図(3)



第11図 B区出土遺物実測図(1)



第12図 B区出土遺物実測図 (2)



第13図 B区(3)、C区、出土地不明出土遺物実測図

には古墳時代から平安時代にかけての集落跡や祭祀遺跡のほか、古墳時代の窯跡や縄文、弥生時代の集落遺跡の存在も十分考えられるところである。

2. 地山面の遺構と出土遺物

地山面は礫混じりの粘性土で表層は厚み10cmほどを測る。古墳時代から平安時代までの須恵器、土師器片もあるが、縄文時代の土器片や、すり石、石斧、黒曜石の肩も認められた。弥生時代の土器片は全くなかった。

表層下の真の地山は、淡灰～淡緑色の粘性土である。地山は全体的にC-1区からB-4、B-5区の方向に傾斜しているが、その高低差はおよそ1.1mと比較的ゆるやかである。

又、D区の北西部からA-5区南にかけても低くなっているが、大井の池が直近にあることから古くから川筋ではなかったかと思われる。

この地山面を精査したところ、縄文時代のドングリ類の貯蔵穴が計19個、同類の穴もしくはそれ以外の目的で造られたと思われる穴が4個、計23個の穴が検出された。

平面形は、いずれも略円形を呈し、小さいもので直径70～80cm（SK06、17、21）、大きいもので2.2m（SK04）、深さは、浅いもので20cm（SK05、17、18）、深いもので90～100cm（SK01、02、09、11）を測る。底はいずれも平坦面を呈する。分布状況は、SK05～19までの15個が調査区東部に密集し、1群を成している他は、中央部から西部にかけて比較的大きな貯蔵穴を含む8個の貯蔵穴が散在している。

【ドングリ類の貯蔵穴】

SK01

上端径1.6×1.45m、底径88×75cm、深さ1.03m、底面は平坦である。中層部から底部にかけて石塊数個と木切れ、木の葉、大きな木板2枚があり、大量のドングリが混在していた。又、上部から石皿の破片1個、磨製石斧の破片1個、縄文土器底部の破片が出上した。

堆積土は、上から

第1層 黒褐色粘質土、厚み約15cm。

第2層 磨混じり茶褐色粘質土、黒曜石の肩あり。厚み約15cm。

第3層 茶褐色疊層、壁際のみ堆積。厚み最大13cm。

第4層 茶褐色砂質シルト土、大石多い。上面から石皿の破片、ドングリ出土。下部から磨製石斧出土。厚み約39cm。

第5層 砂層、礫多く混じる。厚み約15cm。ドングリ若干、木板2枚出土。

第6層 茶褐色腐食土、小枝、葉多く含む。厚み5cm。

第7層 砂層、礫多く混じる。ドングリ出土。厚み10cm。

SK02

上端径1.8×1.65m、底径1.18×0.95m、深さ93cm、底面は平坦である。上層堆積土中から縄文土器の大きな破片1個、下部から大石5個、その下に平坦な石や摩滅した小石7個、擦石1個、縄文土器の体部破片1片、板材、底部から大量のドングリが出土した。

堆積土は、上から

- 第1層 暗茶褐色粘性土、地山の細礫若干含む。すり鉢状に堆積、厚み18cm。
- 第2層 暗褐色～黒褐色粘質土、炭化物と思われる黒色粒多く含む。厚み約25cm。
- 第3層 暗茶褐色シルト質土、黑色粒含む。第4層にかけて大石あり。磨製石斧1個出土。厚み約12cm。
- 第4層 黒褐色砂質土、擦石1個出土。厚み約13cm。
- 第5層 黄褐色砂質土、ドングリ、木枝など植物遺体多く含む。厚み20cm。

SK03

上端径1.3×1.55m、底径0.9×1.15m、深さ77cm、底面は平坦である。上端付近の堆積土から、縄文土器の底部破片が、下層から大石1個、小石2個、木片1個が、底部からドングリ、トチの実が若干出土した。

堆積土は、上から

- 第1層 暗黒灰色粘質土、厚み21cm。
- 第2層 灰色砂質土、石皿1個出土。厚み12cm。
- 第3層 暗茶褐色砂質粘性土、厚み約15cm、擦石1個、ドングリ若干出土。
- 第4層 暗茶褐色粘質土、軟質でドングリ、トチの実、木片が出土。厚み約35cm。

SK04

上端径2.2×2.2m、底径1.72×1.54m、深さ55cm、底面は平坦である。本遺跡中、最大規模の穴である。底部から木の皮や木片とドングリが若干出土した。

堆積土は、上から

- 第1層 黒褐色粘性土、厚み30cm。
- 第2層 茶色シルト質土、厚み12cm。
- 第3層 茶褐色砂質シルト土、厚み8cm。
- 第4層 灰色砂質土、壁寄りに一部堆積。礫を混じえる。厚み30cm。
- 第5層 暗灰色砂質土、礫を混じえる。底面付近から木片、ドングリ出土。

SK05

上端径1.0×1.05m、底径0.75×0.80m、深さ20cm、底面は平坦である。底は一番深い穴である。底部からドングリが出土した。

堆積土は、上から

- 第1層 黒褐色粘質土、礫を混じえる。厚み16cm。
- 第2層 青褐色砂層、ドングリ数個出土。厚み1cm。

SK06

上端径1.15×0.85m、底径0.8×0.67m、深さ70cm、底面は平坦である。すぐに水が湧く穴である。ドングリは出土しなかった。

土塙の南に近接する地山面上で、磨製石斧の破片が1個出土している。

堆積土は、上から

第1層 黄褐色礫層、厚み61cm。

第2層 青褐色砂層、厚み1cm。

SK07

上端径0.99×1.05m、底径73×77cm、深さ60cm、底面は平坦である。底部からドングリが若干出土した。

堆積土は、上から

第1層 黄褐色礫層、厚み36cm。下部4cmほどからドングリ出土。

第2層 青褐色砂層、厚み3cm。

SK08

上端径1.4×2.3m、底径0.8×1.7mの楕円形状で、深さ70cm、底面は平坦であるが、北半部が10cmほど高く、段になっている。北半部か南半部のいずれかを拡張したようである。中層部から大石が大量に出土し、縄文土器の底部などの破片が大量に出土した。下部からは石皿の破片が1個出土した。底部からは、木片に混じってドングリが出土した。

堆積土は、上から

第1層 茶褐色シルト質土、大石多く含み、縄文土器片多く出土。厚み39cm。

第2層 暗茶褐色砂質シルト土、石皿片1個、ドングリ、木片、葉多量出土。厚み29cm。

SK09

上端径0.87×0.95m、底径68×84cmの略円形で、深さ90cm、下面に大石が2個あり、底部は平坦である。下層からドングリが出土した。

堆積土は、上から

第1層 磨層、厚み58cm。

第2層 灰褐色砂質土、ドングリ、木の葉、木枝出土。厚み35cm。

第3層 黄褐色砂質土、厚み6cm。

SK10

上端径1.1×0.85m、底径61×54cmの略円形で、深さ80cm、底面は、平坦である。底部からドングリが出土した。

堆積土は、上から

第1層 黄褐色礫層、下部に大石1個あり。厚み65cm。

第2層 茶褐色粘性土、ドングリ出土。厚み15cm。

SK11

上端径1.3×1.43m、底径1.42×1.07mの略円形で深さ90cm、底部は、北東方向でフラスコ状になるが、底部は平坦で、中央部に大石が1個ありドングリが出土した。

堆積土は、上から

第1層 粘性土、礫を混じえる。厚み60cm。

第2層 黒褐色シルト土、下部からドングリ、木片多く出土。厚み32cm。

SK12

上端径0.98×1.02m、底径67×55cmの略円形で、深さ50cm、底面は平坦である。底部中央に大石が1個あった。底部からドングリが少量出土。

堆積土は、上から

第1層 黄褐色疊層、厚み55cm。

第2層 褐色砂層、底部からドングリ少量出土。厚み2cm。

SK13

上端径1.28×1.18m、底径78×77cmの略円形で、深さ65cm、底面は平坦である。底部からドングリが出土した。

堆積土は、上から

第1層 黒褐色粘質土、疊合む。厚み10~30cm。

第2層 灰褐色粘質土、大石2個あり。厚み30~47cm。

SK14

上端径1.25×1.25m、底径1.03×1.07mの略円形で、深さ60cm、底面は平坦である。土壤内の北半部に大石、南半部に大木が斜め北方向に自生していた。ドングリは出土しなかった。

堆積土は、上から

第1層 暗褐色粘質土、疊合む。厚み13cm。

第2層 黄褐色粘質土、疊合む。厚み42~60cm。

SK15

上端径0.95×1.03m、底径65×84cmの略円形で、深さ27cm、底面は平坦である。ドングリは出土しなかった。

堆積土は、上から

第1層 茶褐色粘性土、小礫を混じえる。厚み21cm。

第2層 茶褐色砂層、厚み3~6cm。

SK16

上端径0.89×1.16m、底径73×89cmの略円形で、深さ70cm、底面は平坦である。

土壤内の底面のまわりに5、6個の石を据え、その内1個は、石皿の破片であった。これらの右の内側には、当地の石材とは明らかに異なる楕円形状の摩滅した石を垂直方向に据えている。その頂部は土壤上面からわずかに顔を出す程度であり、当時は、ほとんど埋没していたものと考えられる。底部からドングリが出土した。

堆積土は、上から

第1層 黄褐色疊層、厚み68cm。

第2層 茶褐色土、ドングリ出土。厚み3cm。

SK17

上端径 0.68×0.78 m、底径 47×59 cmの略円形で、深さ18cm、底面は平坦である。底部からドングリが出土した。

堆積土は、上から

第1層 茶褐色粘性土、厚み17cm。

第2層 砂層、ドングリ多く出土。厚み1cm。

SK18

上端径 $1.16 \times$ 推定 1.2 m、底径 92 cm×不明の略円形で、深さ17cm、底面は平坦である。全ての土層からドングリが出土した。

堆積土は、上から

第1層 茶褐色粘性土、ドングリ出土。厚み15cm。

第2層 砂層、ドングリ出土。厚み2cm。

SK19

上端径 1.03×1.03 m、底径 62×66 cmの略円形で、深さ89cm、底面は平坦である。下層に大石が2個あった。

堆積土は、上から

第1層 黒褐色粘性土、礫含む。隣のSK13の第1層と同じ土層である。厚み1~10cm。

第2層 暗灰色礫層、砂を混じえる。厚み38cm。

第3層 茶褐色粘性土、大石2個あり。厚み48cm。

SK20

上端径 1.33×1.2 m、底径 0.73×1.08 mの略橢円形で、深さ40cm、南部の壁はプラスコ状で約8cm入り込む。底面は平坦であるが、北半部が6cm低くなっている。底面からドングリが4、5個出土した。

堆積土は、上から

第1層 淡青灰色粘土、砂を混じえる。厚み38cm。

第2層 青色砂層。厚み2cm。ドングリ出土。

SK21

上端径 79×79 cm、底径 64×56 cmの略円形で、深さ45cm、底面は西部が9cmほど低くなる。底面からドングリが出土。堆積土上面から擦石が1個出土した。

堆積土は、上から

第1層 茶褐色粘性土、礫を混じえる。擦石1個出土。厚み15cm。

第2層 灰白色礫層、厚み23cm。

第3層 茶褐色砂層、ドングリ少量出土。厚み1~2cm。

第4層 小礫層、砂を混じえる、厚み1~10cm。

SK22

上端径1.4×1.25m、底径85×88cmの略円形で、深さ71cm、底面は平坦である。底部には大石が1個あった。堆積土上層からトチの実、クルミの実、下層からドングリが出上した。このうち、トチの実が圧倒的に多い。

堆積土は、上から

第1層 暗褐色粘性土、礫含む。クルミ、トチを多く含む。厚み35cm。

第2層 暗褐色シルト土、小枝、葉を多量に含む。厚み5cm。

第3層 暗褐色シルト土、葉を含む。厚み12cm。

第4層 茶褐色シルト土、小枝、葉を含む。大石あり。厚み16cm。

第5層 茶褐色砂層、ドングリ少量含む。厚み2cm。

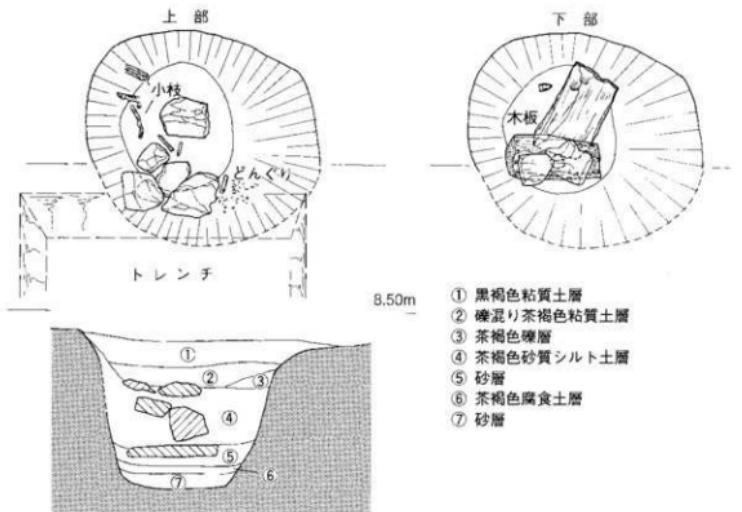
SK23

壁の断面に確認されたものであり、大きさなどは不明であるが、断面で見るかぎり径は最低60cm以上、深さは17cm以上である。底面は平坦で、ドングリが出上した。

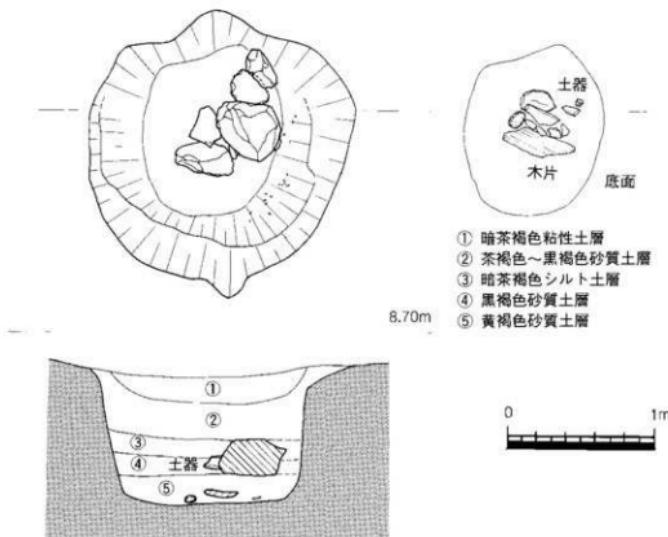
堆積土は、黒褐色土で、ドングリと植物遺体を多く含む。

W01~08

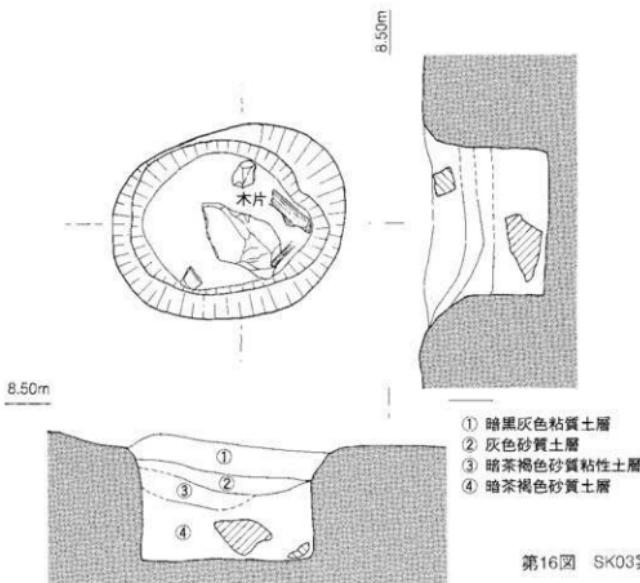
埋没林である。東部の標高8m以下の小支谷に集中して遺存していた。地下水が豊富なため腐食しなかったためと思われる。



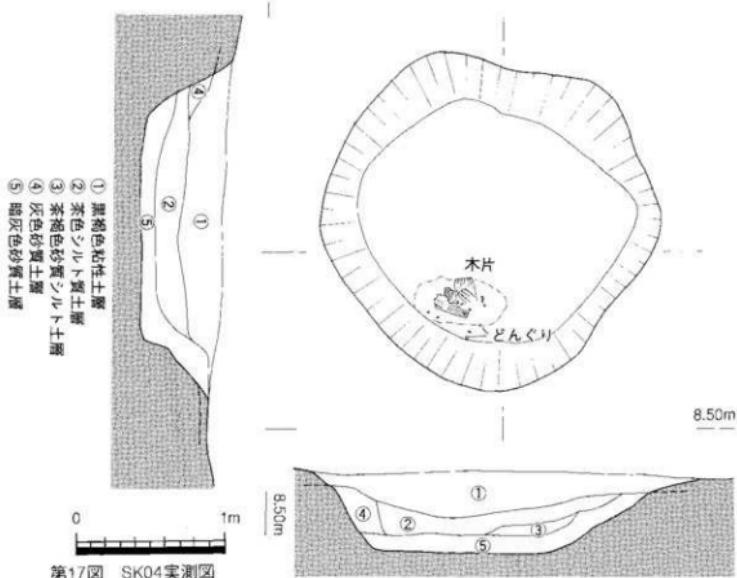
第14図 SK01実測図



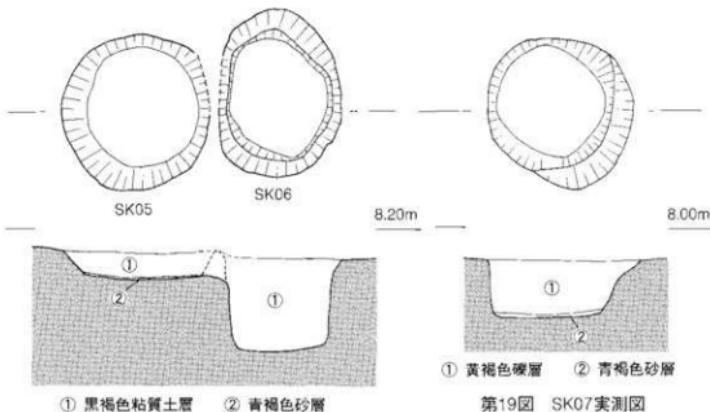
第15図 SK02実測図



第16図 SK03実測図

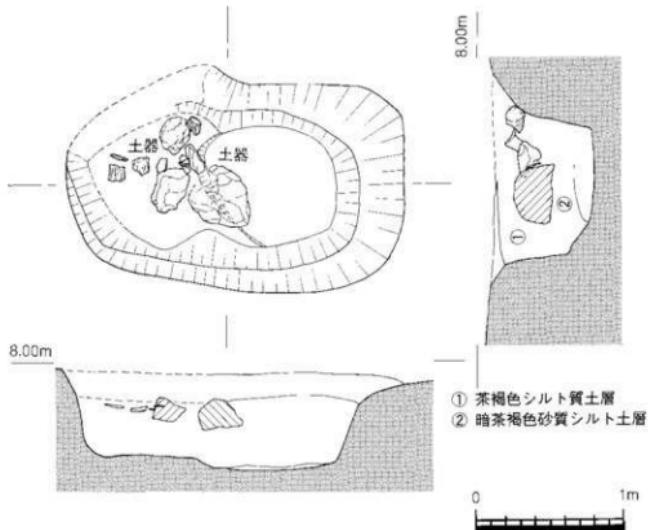


第17図 SK04実測図

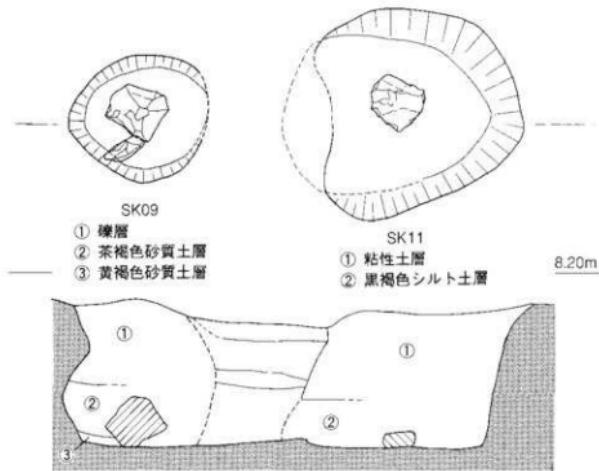


第18図 SK05、06実測図

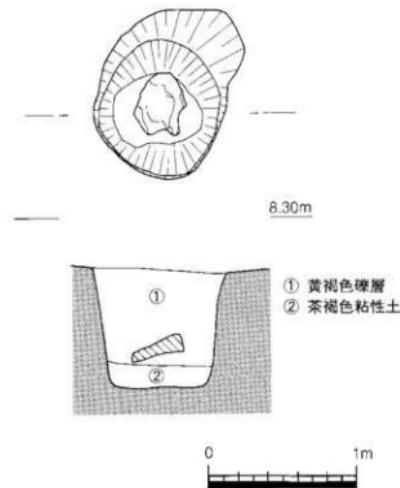
第19図 SK07実測図



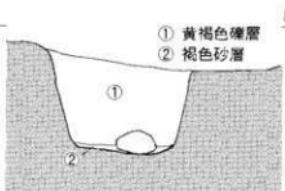
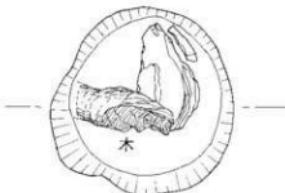
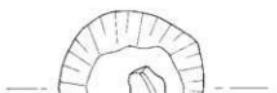
第20図 SK08実測図



第21図 SK09、11実測図

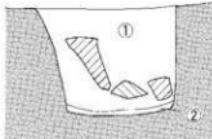
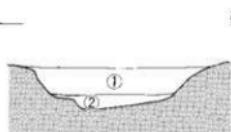
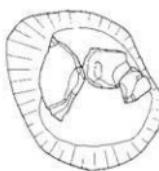
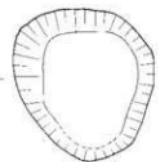


第22図 SK10実測図



第23図 SK12実測図

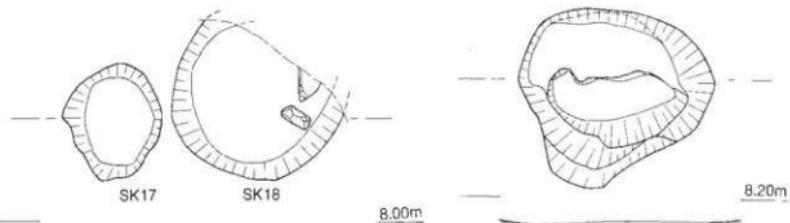
第24図 SK14実測図



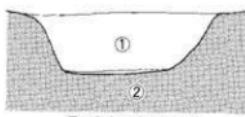
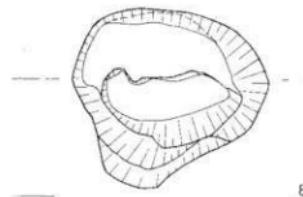
第25図 SK15実測図



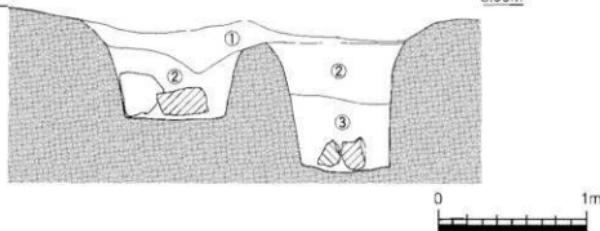
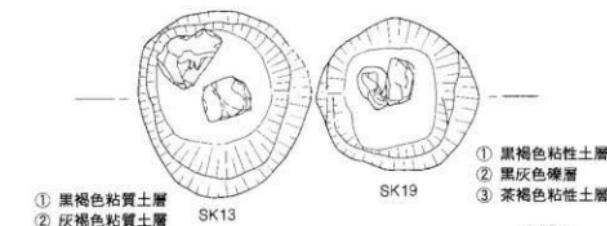
第26図 SK16実測図



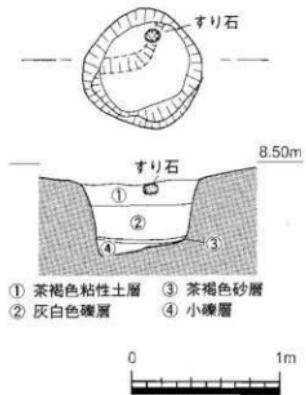
第27図 SK17、18実測図



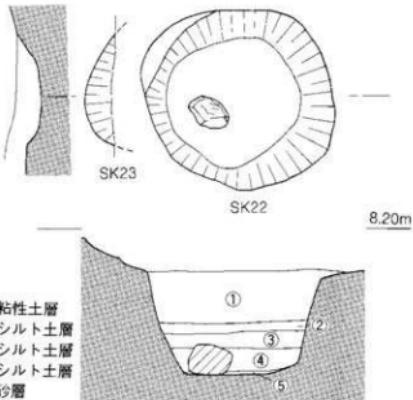
第28図 SK20実測図



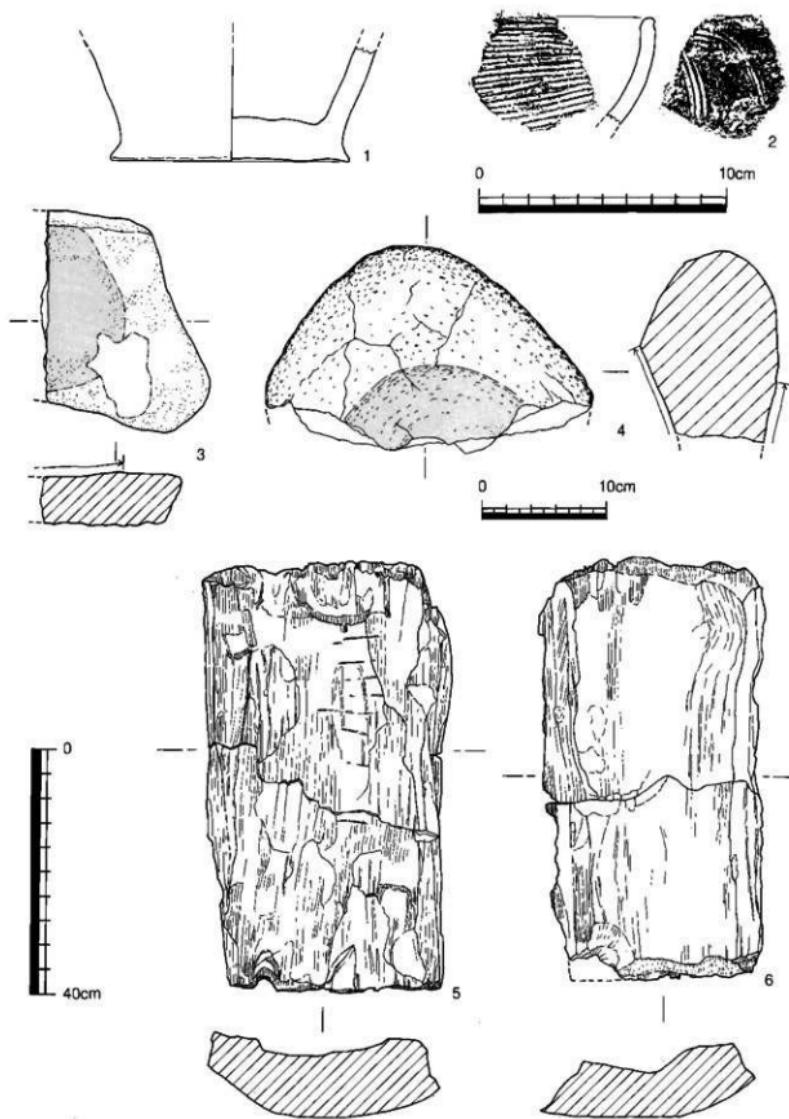
第29図 SK13、19実測図



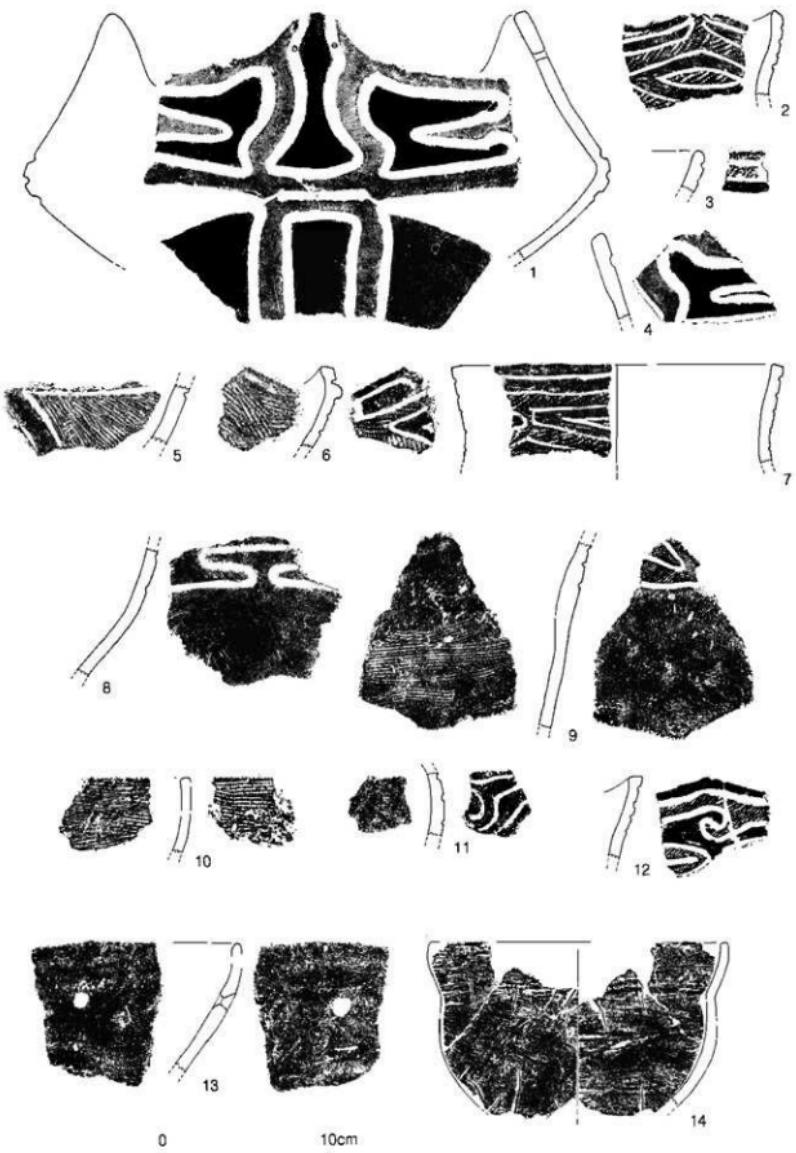
第30図 SK21実測図



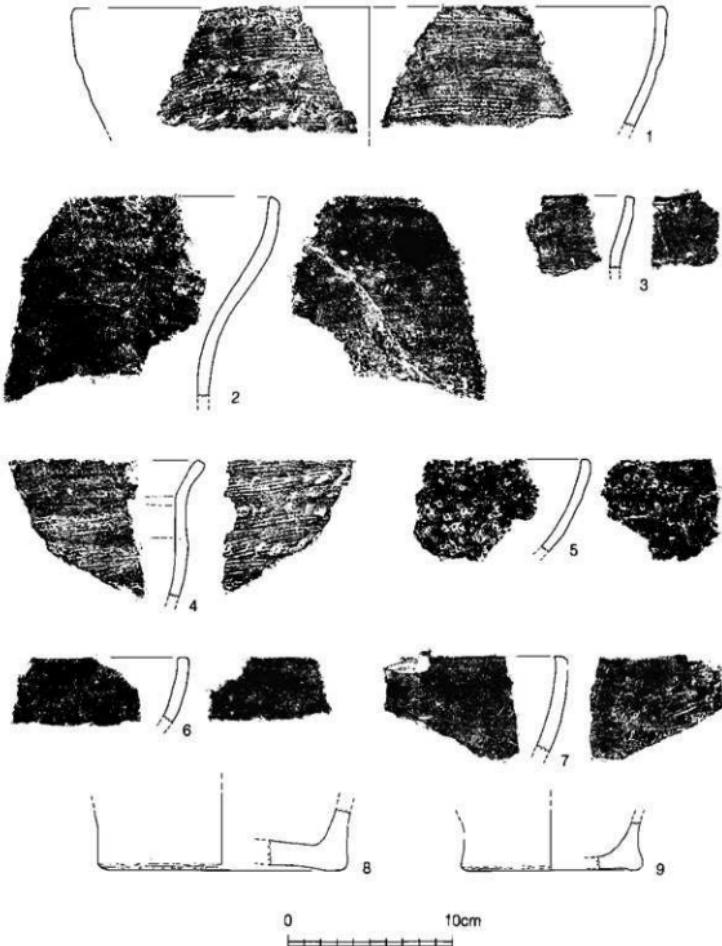
第31図 SK22、23実測図



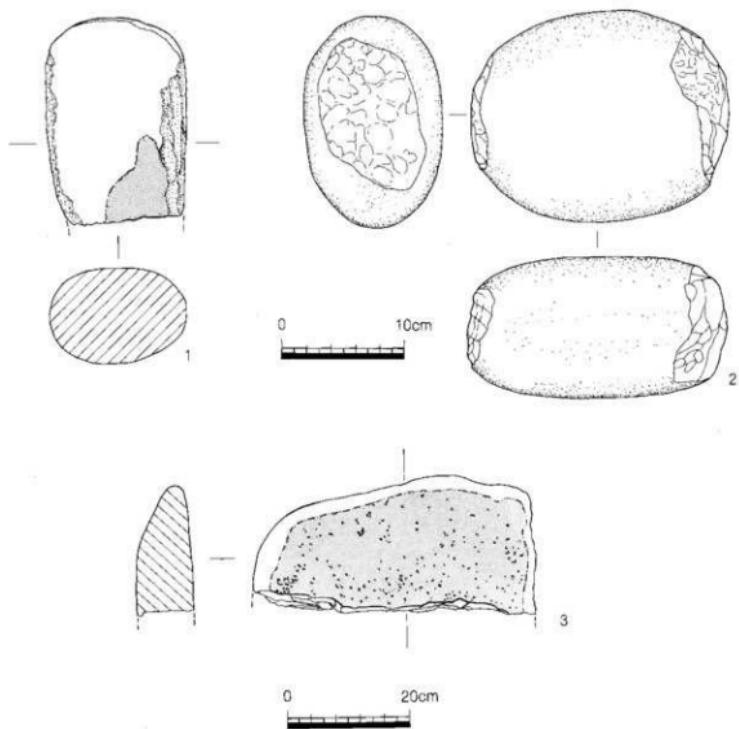
第32図 SK01出土遺物実測図



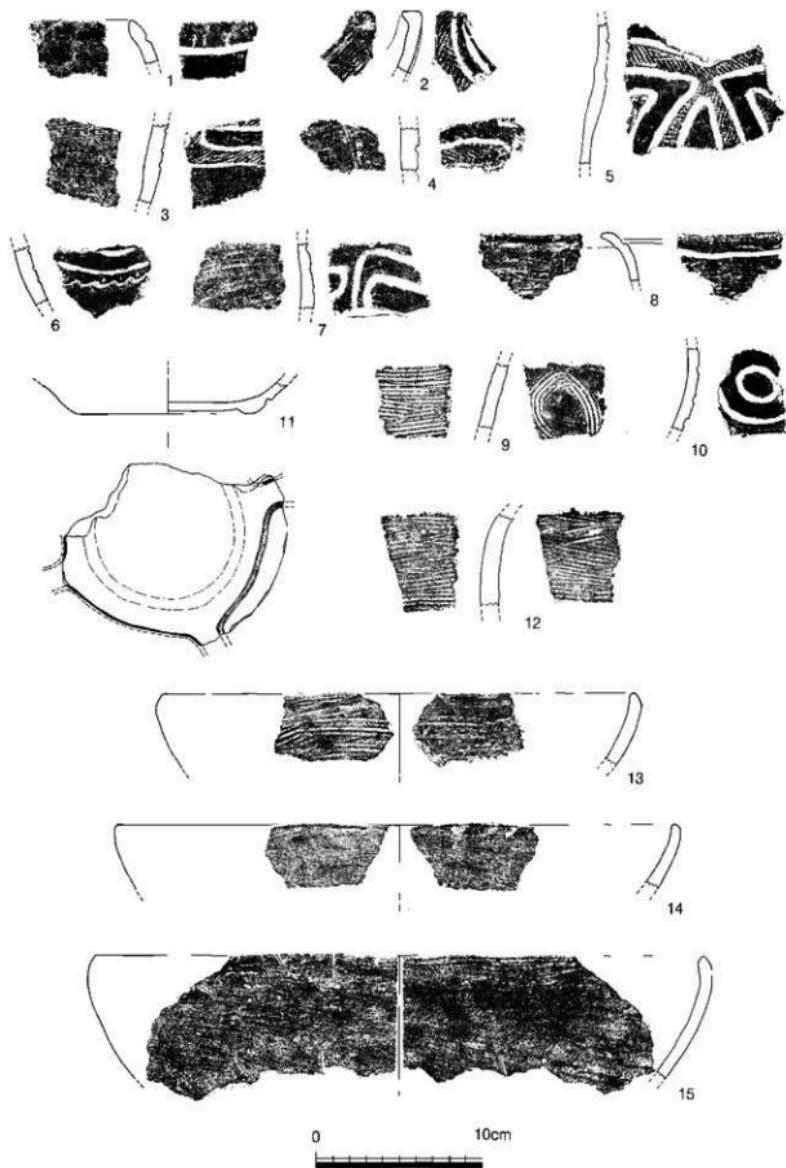
第33図 SK02出土遺物実測図（1）



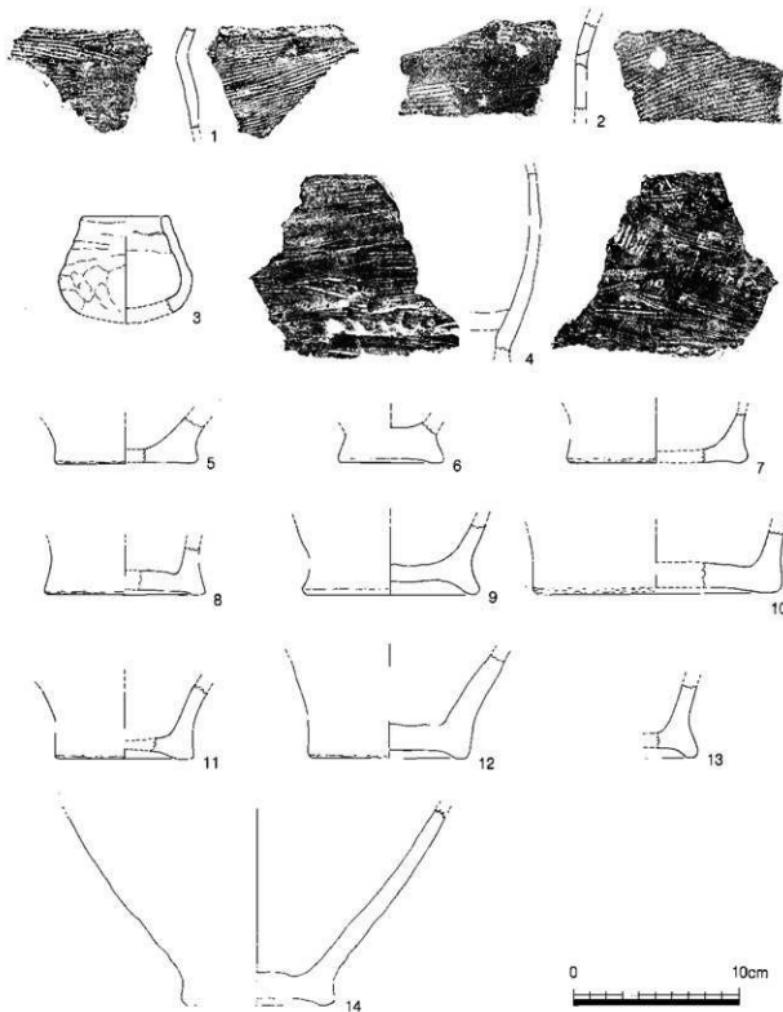
第34図 SK02出土遺物実測図（2）



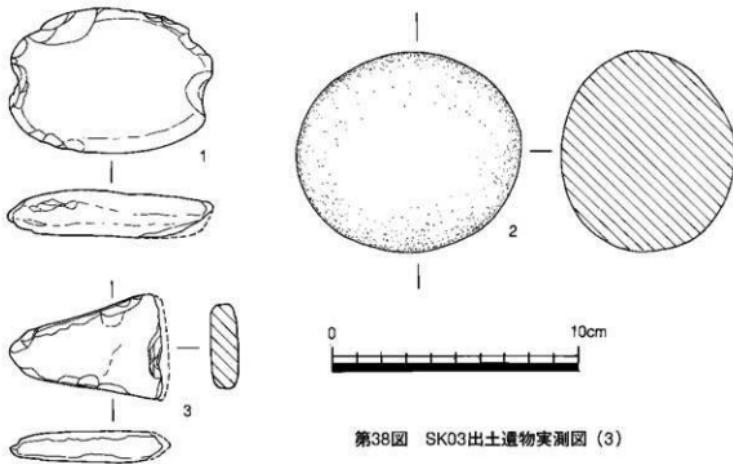
第35図 SK02出土遺物実測図（3）



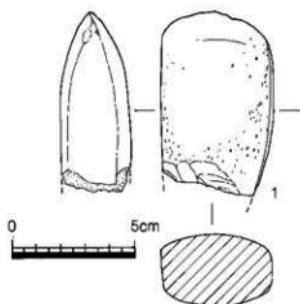
第36図 SK03出土遺物実測図 (1)



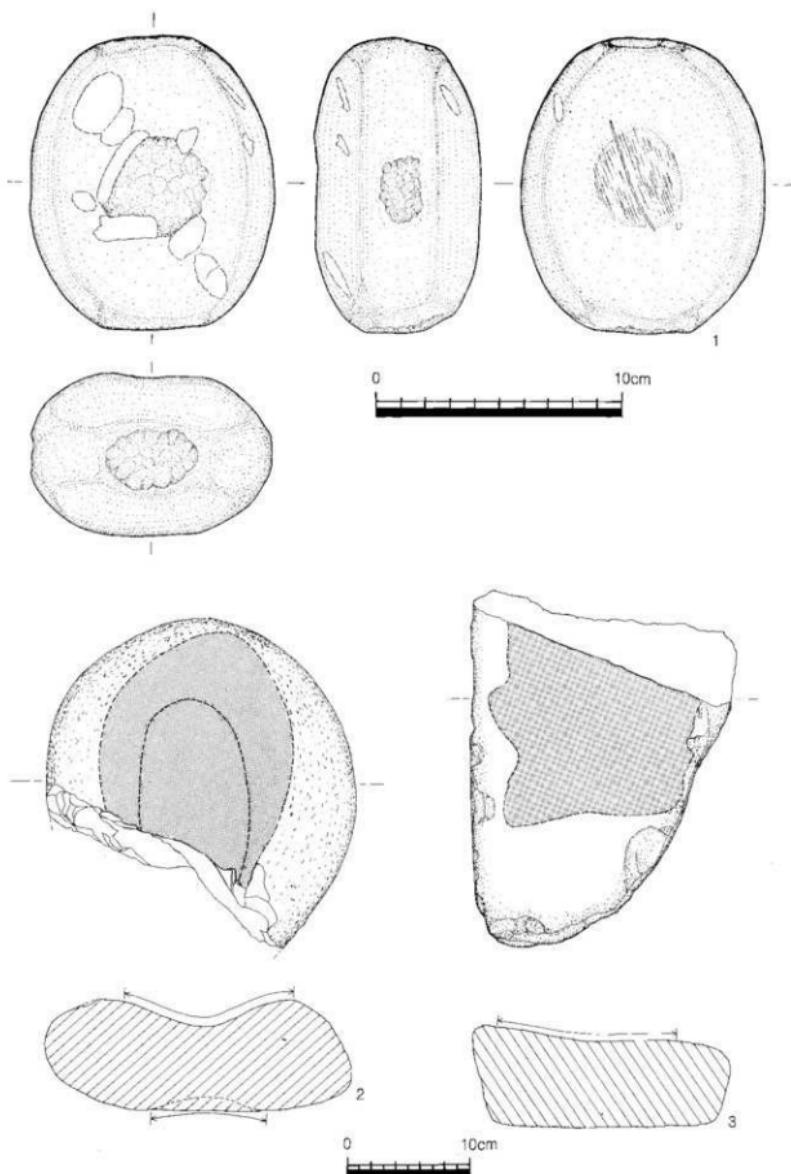
第37図 SK03出土遺物実測図 (2)



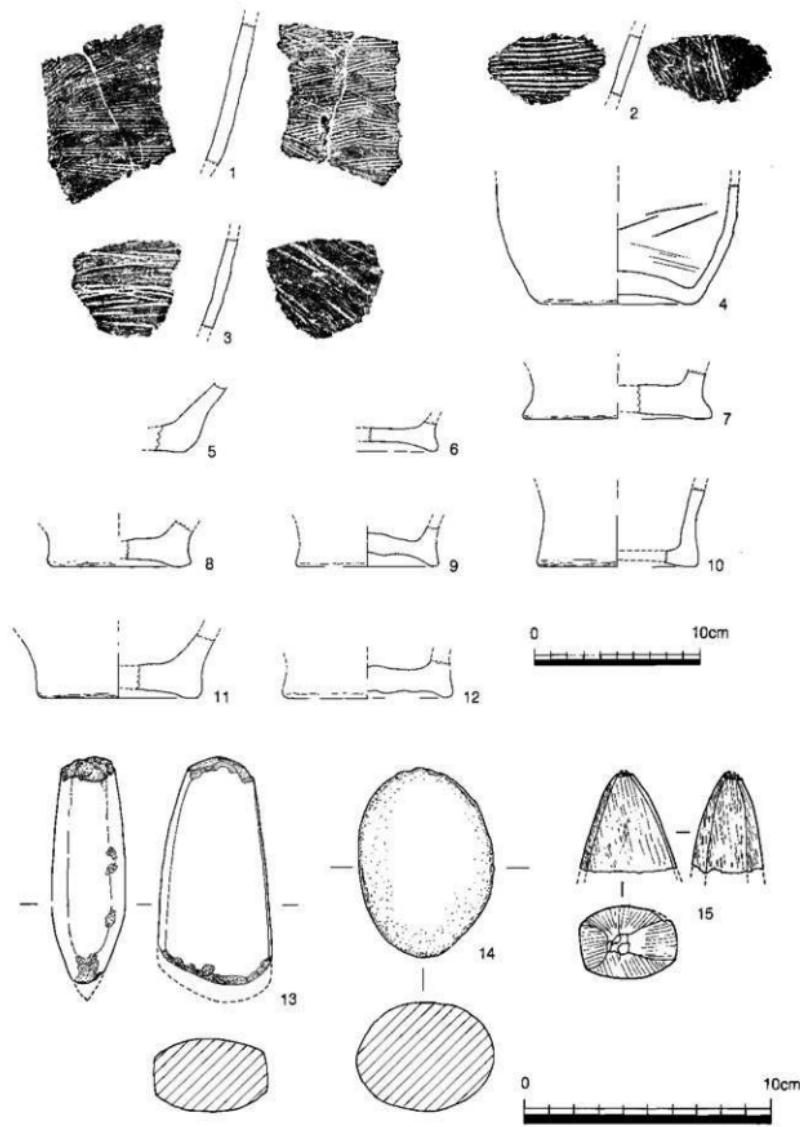
第38図 SK03出土遺物実測図 (3)



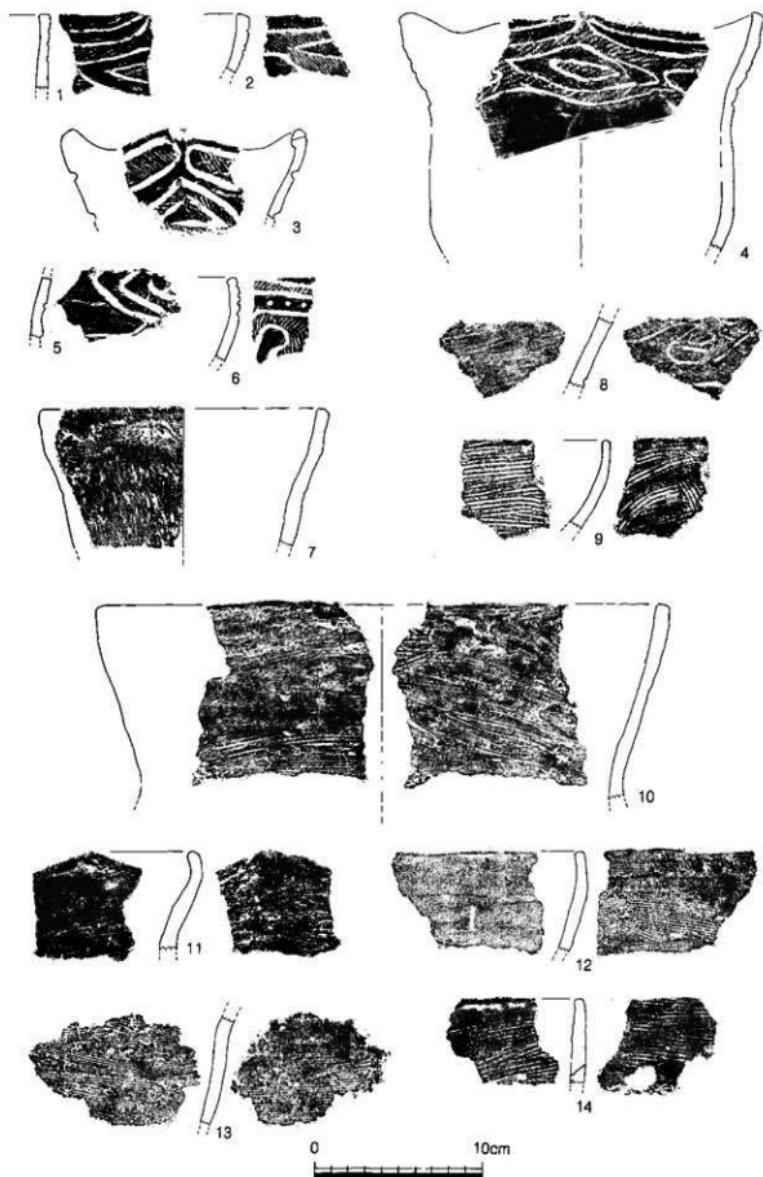
第39図 SK06出土遺物実測図



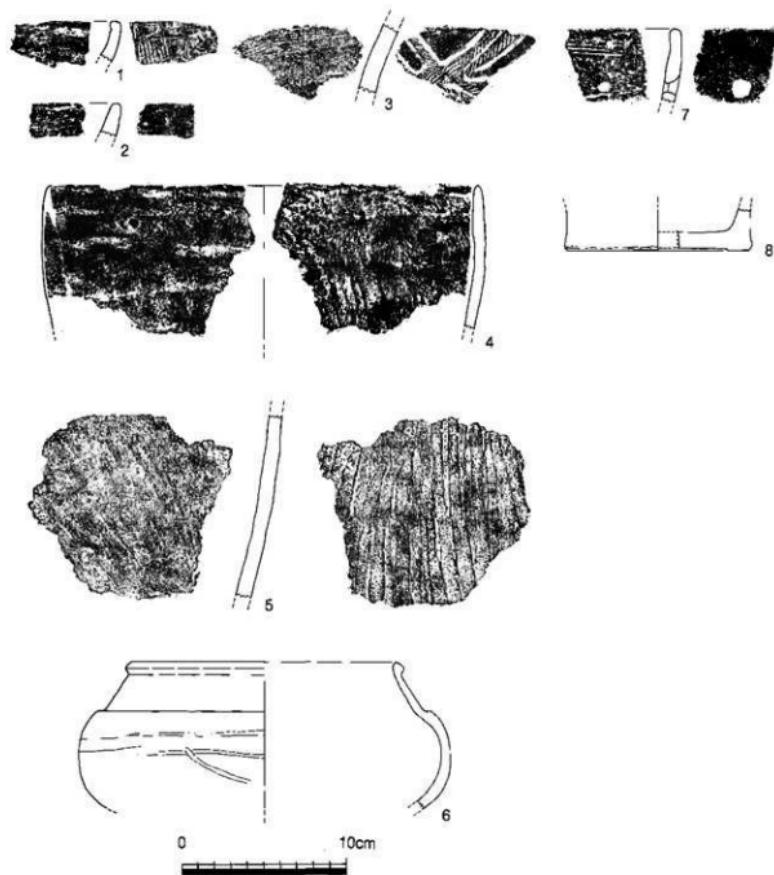
第40図 SK08出土遺物実測図（1）



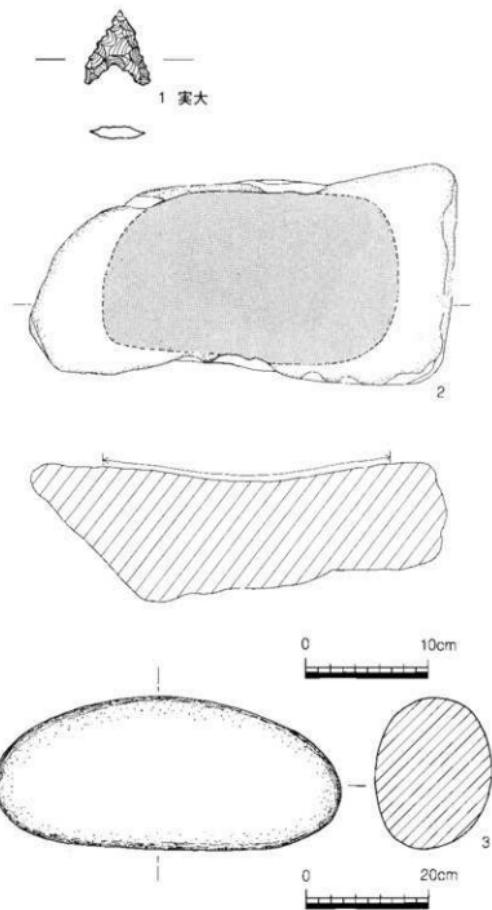
第41図 SK08出土遺物実測図 (2)



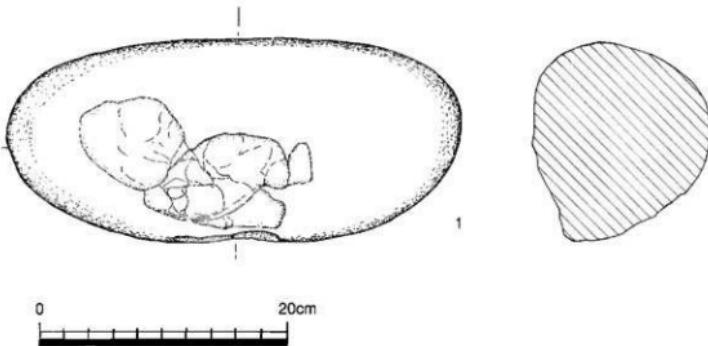
第42図 SK08出土遺物実測図(3)



第43図 出土遺物実測図
1~6 (SK11)、7 (SK19)、8 (SK13)



第44図 SK16出土遺物実測図



第45図 SK22出土遺物実測図

IV 遺物と遺構の検討

1. 遺物の検討

(1) 土器類

① 繩文土器

土壤の内部堆積土中及び周辺地山面上から出土した土器は、そのほとんどは縄文時代後期初頭頃の所謂「中津式」と呼称されるもので、一部中期末の「北白川C式」に類似した土器が認められる。

<北白川C式類似>

A区出土の棒状工具で連続刺突文をつけるもの（第8図4）、B区出土のすり消し縄文や口縁部を肥厚させるタイプのものがある。（第11図2、5）

<中津式>

中津式土器の大半は、すり消し縄文を施紋する精製有文土器と条痕地と主体とする粗製無文土器に分かれる。すり消し縄文土器には、深鉢と浅鉢があり、殆どが山形口縁となる。中には、SK02で出土の浅鉢（第33図1、4、12）のように内面もよくハラ磨きし、「丁寧なつくり」の土器もある。口縁部は、くの字に屈曲するタイプ（第33図1）と口縁部分が内湾し、下方に傾斜していくタイプ（第33図14、第34図2、第42図4）、外反するタイプ（第34図4）がある。縄文には、貝殻施紋による擬縄文も認められる。一部刺突文を施すものもある。又、沈線のみで施文するものもある。（第36図6、7、第42図5）粗製土器にも深鉢と浅鉢の2種があるが、深鉢の体部は概してくの字で、浅鉢の体部は単純に内湾する。口縁部資料に関して、その比率を見てみる。

表1 器種構成比率

有文深鉢	条線文深鉢	無文深鉢	有文浅鉢	無文浅鉢	計
8	2	25	2	1	38点
21.0%	5.3%	65.8%	5.3%	2.6%	100%

まず、有文土器（精製土器）と無文土器（粗製土器）の比率を見てみると無文土器が70%弱で優勢である。次に深鉢と浅鉢の比率を見てみると深鉢が約92%と圧倒的に多い。個別の器種構成で見てみると、無文深鉢が全体の約66%で3分の2を占める。ついで有文深鉢が21%で両者で全体の約87%を占める。

総じて、無文・有文の深鉢を中心に構成されていることがわかる。底部は、25点あるが、いずれも深鉢の底部である。これらの土器は、中津式の中でも最も初期のものの一括資料として非常に注目される。

② 弥生土器

第43図6は、夜臼式並行の土器であり、この地域でいち早く弥生文化が導入されたことがわ

かる。又、中期の土器や石器が数点認められているので（第10図3、第11図8、9、12～20）前期や後期の土器はないが、場所を移しながら農耕集落が営まれていたことが考えられる。いずれにしても弥生土器は、大井地区では初めての出土例となる。

③ 土器

前期古式土器の壺、甕、中期の高坏が認められる。（第13図1～5、第10図2、10）

④ 須恵器

1期の蓋坏、高坏、3期の坏、4期の蓋、奈良期の長頸壺、完形の小壺、瓶、大甕が出土。他に図示していないが器台の破片もある。（第10図1、4～9、11～15、第13図6）

⑤ 土馬

8点出土。頭部1点、胴部2点、脚部5点、B区出土の第12図2のように大型の破片もある。（第9図4、第12図1～3、第13図7、8、13、14）

⑥ 土錐

10点出土。おしなべて古墳時代以降のものと思われる。C区出土の第13図9のように須恵質のものも見受けられる。（第9図7～10、第12図7～9、第13図9、11、12）

⑦ 陶磁器類

図示していないが備前焼や貿易陶磁の青磁碗の高台部分もある。

(2) 石器

① 擦石

9個出土。SK03から1個（第38図2）、SK08から2個（第40図1、第41図14）、地山上の堆積土中から6個出土。（第8図12、第9図1～3、第13図10、16、17）石材は、青緑色の火成岩質が大半で当地のものではない。

② 叩き石

SK02から1個出土。長径12cm、短径10cm、厚み6.8cmを測る。3面に打痕が認められる。擦石としても機能も兼ねる。（第35図2）

③ 石皿

6個出土。SK01から2個（第32図3、4）、SK02から1個（第35図3）、SK08から2個（第40図2、3）、SK16から1個（第44図2）出土。形状は概して稍凹形の石の中央部をくぼめる通常のものだが、SK16から出土したものは、板状にくぼみ非常に滑沢のある面を有し他のものと機能が異なるものと考えられる。破片となったものを貯蔵用の重しとして転用した可能性がある。

④ 磨製石斧

10個出土。SK02から1個（第35図1）、SK03から1個（第38図3）、SK06の直近地面上から1個（第39図1）、SK08から2個（第41図4、6）、地山上の堆積土中から5個出土（第8図9～11、第10図16、第12図4）この内、大型のものが1個、長さ10cm前後の整状のものが6個ある。

⑤ 打製石斧

地山上の堆積土中から1個出土。(第12図5)

⑥ 打製石器

A区出土の第8図7は、打製石包丁と思われる。両端を打ち欠き紐を掛ける。第8図8は、打製石鎌の破片である。いずれも弥生時代のもの、他に未製品がある。(第12図6)

⑦ 石棒状石

3個出土。SK16(第44図3)、SK22(第45図1)から各1個づつ。周辺地面上から1個出土。(第9図6)いずれも加工した形跡はなく、石棒と断定はできないが、土壤内から2個出土したこと、特にSK16での検出状況を見ると信仰の対象とされていてもおかしくない。また、石材が当地のものとは明らかに違うものであることから、その可能性を指摘しておく。

⑧ 石錐

2個出土。1個はSK03出土。(第38図1)他ののは出土地不明である。(第13図15)

⑨ 石鎌

4個出土。黒曜石製のもの3個(第8図6、第12図10、第44図1)、安山岩系統のもの1個(第8図5)が出土。全て凹基無茎式のもの。3個は地面上の堆積土層中から出土。1個はSK16から出土。

⑩ 黒曜石のチップ

地面上や土壤内はもちろん地面上の奈良時代までの堆積土層からも混在して大量に出土した。あまり大きな破片はない。付近で石器に加工していたことが容易に考えられる。

(3) 木製品

① 板 SK01から2枚出土。材質はいずれもカシ類と鑑定された。

A 長さ69cm、幅33.5cm、厚みは7~9cmを測る。直径1mほどの大木の芯と樹皮を除いた部分である。全体に目が荒く、殆ど加工はしていない。(第32図6)

B 長さ71cm、幅36.5cm、厚みは6cmを測る。直径1mほどの大木の芯と樹皮を除いた部分である。全体に目が荒く、殆ど加工はしていない。この2枚は、加工前に一時的に水につけ野木していた可能性が考えられる。(第32図5)

(4) 自然遺物

① 植物種子

ドングリ類には、アカガシ、イチイガシなど数種類が認められる。中でもアカガシが圧倒的に多い。

他にSK03ではトチの実が、SK22では、トチの実とクルミの実が遺存していた。これらはいずれも実が割られていたことと、地山の微地形が筋状に産んでおり上方に湧水地点があることから小規模の水路となっていたことが考えられ、そうした水路を利用してSK22を掘り、水さらしの工程で使用した可能性が高い。

② 木枝、樹皮

土壌内にドングリ類を貯蔵した際の蓋の役割を果たしていたものと考えられる。

③ 葉

落葉広葉樹の葉である。これも木枝、樹皮と同様の役割を果たしていたものと考えられる。

2. 遺構の検討

1. 貯蔵穴について

鳥取県内におけるドングリ類の貯蔵穴の調査例は以下の通りである。

表2 堅果類貯蔵穴検出例一覧

①邑智郡瑞穂町	郷路橋遺跡	トチ	1基	C14で前期中葉頃	文献7
②松江市手角町	寺の脇遺跡	ドングリ	1基	中期頃	9
③八束郡鹿島町	佐陀講武貝塚	ドングリ	1基	中期以降	5
④松江市大井町	九日田遺跡	ドングリ、トチ クルミ	23基	後期初頭頃	
⑤松江市手角町	夫手遺跡	ドングリ	不明	0.7m ²	
⑥出雲市塩冶町	三田谷I遺跡	ドングリ	20基	晚期頃	8
⑦八束郡八雲村	前田遺跡	ドングリ	37基	晚期頃	6
⑧松江市西川津町	西川津遺跡	ドングリ	1基	弥生・中期	

又、鳥取県内における調査例は、以下の通りである。

①米子市	日久見遺跡	ドングリ	14(+34)基	中期	1
②米子市	陰田遺跡	不詳	3基	不詳	2
③岩美郡福部村	栗谷遺跡	ドングリ、クルミ トチ、ヒシ	37基	後期前葉～中葉	3
④鳥取市	大路川遺跡	トチ、アラカシ アベマキ、クルミ	7基	晚期前半	4
⑤東伯郡三朝町	三朝高原穴谷遺跡	不詳	2基	不詳	
⑥西伯郡会見町	枇杷谷遺跡	ドングリ類	2基	晚期後半～弥生前期	11
⑦日野郡溝山町	井後草里遺跡	シバゲリ、クヌギ	3基	後期末～晚期初頭	10

このように調査例はまれであるが、縄文時代の冬期の重要な食料資源であったことを考えると、集落周辺には必ずあった施設と考えられる。しかもムラ単位で平均20～40位の基数があったと思われる。

土器などから示す各遺跡の年代は、單一の時期に限られていることが分かるが、このことは、集落の定住化が進まず、比較的短期間で移動したことを示すのか、あるいは、洪水や気候の急激な変化など自然の要因により移動を余儀なくされたのかというような原因が考えられる。

次に土壌の規模を検討すると、一様に底面が平坦であることが挙げられるが、これは西日本の貯蔵穴に共通した形態と一致する。

又、深さが20cm前後と浅いものと1m前後の深いものとの2種がある。山陰地方の他遺跡の

例は、殆どが浅いものである。深い貯蔵穴は、種子を一度に大量に貯蔵するためとも考えられるが、どちらかというと恐らく地下水の湧水のレベルに関係するものと思われる。

次に地形から立地の状況を見ると、SK05～SK19までの15基が東側の微小さな谷筋に集中していることが分かる。地下水の湧きやすい区域であったであろう。

中央部に分布するSK04とSK20は、東部と西部の貯蔵穴群からやや離れて立地している。

又、SK22は、前述したように水さらしの工程で使用したか、投棄場であったかと考えているが、微地形的には北から南方向へ幅約3m、深さ50cmほど筋状に地山が低くなっている。大井の集落の北西方向の谷部からの雨水や湧水の集まる区域に当たるので、当時の地形が変化なければ川筋に当たっていたことが考えられ、アクぬきを必要とするトチの木の水さらしの作業場もしくは投棄の場としては適した場所であったことが考えられる。

V まとめ

この遺跡の北西15mの山裾には、大井神社の湧水池があり、今でも豊富な地下水が湧き出ている。又、発掘調査の結果でも殆どの貯蔵穴から湧水が認められた。

恐らく縄文時代においても水に恵まれた住みやすい地域であったと考えられる。

今回の調査では住居跡は検出されなかったが、当時の集落はこの貯蔵穴群の近隣の山裾一帯に想定される。今回の調査では、松江市域の検出例の少ない縄文時代後期初頭頃の集落の周辺地における食物加工の実態にいくぶんか迫ることができたのではないかと考える。

参考文献

- 「日久見遺跡」米子市教育委員会 1986
- 「陰田——一般国道米子バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」建設省中国地方建設局倉吉工事事務所、米子市教育委員会 1984
- 「栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅲ」福部村教育委員会 1990
- 「松原谷田遺跡Ⅱ、大路川遺跡調査概報」鳥取市教育委員会 1976
- 「佐太講武貝塚発掘調査報告書2」鹿島町教育委員会 1994
- 「琴との遭遇～前田遺跡の発掘～」川上昭一 1998
- 『平成10年度しまね県民大学専門講座Ⅲ、風土記の丘教室11月例会発表要旨』
- 「中國横断自動車道広島浜田線建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ(郷路橋遺跡)」鳥根県教育委員会 1991
- 「斐伊川報水路発掘物語(三田谷I遺跡)」鳥根県埋蔵文化財調査センター 1998
- 「寺ノ脇遺跡 県道松江一境線改良工事埋蔵文化財緊急調査報告」鳥根県文化財愛護協会 1969
- 「上中ノ原・井後草里遺跡発掘調査報告書」鳥取県日野郡溝口町教育委員会 1983
- 「枇杷谷遺跡発掘調査報告書」鳥取県西伯郡会見町教育委員会 昭和62年

九日田遺跡 遺構一覧

上端番号	法 量 (m)	出土遺物、特記事項
S K01	上端径1.6×1.45 深さ1.03 底径0.88×0.75	ドングリ大量、石皿2、縄文土器、木板2
S K02	上端径1.8×1.65 深さ0.93 底径1.18×0.95	ドングリ大量、石皿1、叩き石、磨製石斧1、縄文土器
S K03	上端径1.3×1.55 深さ0.77 底径0.9×1.15	ドングリ、トチ若干、擦石1、磨製石斧1、石錐1、縄文土器
S K04	I:端径2.2×2.2 深さ0.55 底径1.72×1.54	ドングリ
S K05	上端様1.0×1.05 深さ0.20 底径0.75×0.80	ドングリ
S K06	上端径1.15×0.85 深さ0.70 底径0.8×0.67	付近地山に磨製石斧1
S K07	上端径0.99×1.05 深さ0.60 底径0.73×0.77	ドングリ若干
S K08	上端径1.4×2.3 深さ0.70 底径0.8×1.7	ドングリ、石皿2、磨製石斧2、擦石2、縄文土器
S K09	I:端径0.85×0.85 深さ0.70 底径0.68×0.84	ドングリ
S K10	上端様1.1×0.85 深さ0.80 底径0.61×0.54	ドングリ
S K11	I:端径1.3×1.43 深さ0.90 底径1.42×1.07	ドングリ、縄文土器
S K12	上端様0.98×1.02 深さ0.50 底径0.67×0.55	ドングリ少量
S K13	I:端径1.28×1.18 深さ0.65 底径0.78×0.77	ドングリ、縄文土器底部1
S K14	上端様1.25×1.25 深さ0.60 底径1.03×1.07	なし
S K15	上端径0.95×1.03 深さ0.27 底径0.65×0.84	なし
S K16	上端様0.89×1.16 深さ0.70 底径0.73×0.89	石皿1、石棒状石1、石錐、ドングリ
S K17	I:端径0.68×0.78 深さ0.18 底径0.47×0.59	ドングリ
S K18	I:端径1.16×(1.20) 深さ0.17 底径0.92×不明	ドングリ
S K19	上端径1.03×1.03 深さ0.89 底径1.62×0.66	縄文土器口縁部1
S K20	上端径1.33×1.20 深さ0.40 底径0.73×1.08	ドングリ若干
S K21	上端径0.79×0.79 深さ0.45 底径0.61×0.56	ドングリ少量
S K22	I:端径1.40×1.25 深さ0.71 底径0.85×0.68	トチ大量、クルミ、ドングリ、石棒状石1
S K23	I:端径推定0.60以上 深さ0.17 底径以上	ドングリ

出土遺物観察表

A 区出土遺物観察表

押印番号	時代	器種	調査・手法の特徴等の説明と出土箇所	
8-1	縄文	鉢	(外)ナデ(内)ナデ、山形口縁部上端に幅3ミリ、長さ1cmの溝、口縁部直下に直径6.5ミリの円孔と両側に円形刺突をつける。A-6区。	
8-2	縄文	漆 鉢	(外)ナデ、(内)ナデ A-6区。	
8-3	縄文	漆 鉢	(外)ナデ、(内)ナデ A-5区。	
8-4	縄文	鉢	(外)ナデ、棒状工具で連續刺突文をつける。(内)ナデ A-5区。	
8-5	不明	石 磨	安山岩質、長さ1.9cm、基部幅0.95cm、厚み4ミリ、A-8区。	
8-6	不明	石 磨	黒曜石質、長さ2cm、基部幅1.3cm、厚み4ミリ。A-1区。	
8-7	弥生	打製石刀	長さ6.2cm、幅3.4cm、最大厚み9ミリ、片面一部に研磨面あり。両側部を5ミリほど抉るタイプである。黒色安山岩系。A-7区。	
8-8	弥生	打製石鎌	残存長4.7cm、幅3.2cm、最大厚み9ミリ。黑色安山岩系。A-7区。	
8-9	弥生	磨製石斧	残存長8cm、幅3.5cm、厚み2.15cm。A-2区。	
8-10	縄文	磨製石斧	乳棒状で刃部を欠く。断面は、やや柄張りの丸角長方形で4.6×3.1cm。緑色火成岩系。A-6区。	
8-11	縄文	磨製石斧	残存長8.4cm、幅3.5cm、厚み最大2.5cm。基部を欠失する。黒色玄武岩系。A-7区。	
8-12	縄文	石 壁	長8.15cm、幅5.6cm×4.25cm。石英斑岩系。	
9-1	縄文	くぼみ石	7.75×6.3cm、厚み3.7cm。両面中央部に凹面が認められる。それぞれ3.5×2.9×深さ1mm、2×2×深さ2mmを測る。A-3区。安山岩系。	
9-2	縄文	擦 石	残存7.6×7.9×厚み5.8cm。数箇所特にすり減った箇所が見られる。A-3区。多孔質玄武岩系。	
9-3	縄文	擦 石	半径13×10.3cm、厚み6.7cm。両面中央部が平滑である。側面は不使用。閃綠岩系の石。A-3区。	
9-4	古墳	須恵土 貨馬	残存長5.8cm、厚み2.2cm。面取りを施し、接地面は約1cmの平坦面をつくる。前脚か。A-5区。	
9-5	古墳	ガラス小片	長7ミリ、厚み8ミリ、直徑1ミリの円孔あり。コバルトブルー色で半部を欠失する。A-5区。	
9-6	縄文	石 棒状石	長さ42.8cm、厚み11.4cm。全体に打抜があり、一方の側が先端から8cmの部位でやすりままで直徑7.5cmを測る。A区埋十中。	
9-7	古墳	須恵土 貨馬	長3.1cm、厚み3cm、直徑6~7ミリの円孔あり。A-8区。	
9-8	古墳	須恵土 貨馬	長3.4cm、厚み3.4cm、直徑7ミリの円孔あり。A-6区。	
9-9	古墳	須恵土 貨馬	長2.9cm、厚み3.5cm、直徑0.8~1cmの円孔あり。A-1区。	
9-10	古墳	須恵土 貨馬	長9cm、厚み4.2×4.5cm、直徑1.5~1.7cmの円孔あり。大形である。A-1区。	
10-1	古墳	須恵土 器	外面は平行叩きのあと部分的に横ナデ調整。内面は押し当て具痕あり。A-5区。	
10-2	古墳	須恵土 器	口径15.2cm。頸部内面以下ヨコ方向の削り調整。A-5区。	
10-3	弥生	上 器	底部。底径7.2cm。A-8区。	
10-4	古墳	須恵土 器	外面は平行叩き。内面は押し当て具痕あり。A-5区。	
10-5	古墳	須恵土 器	口径1.6cm、器高7.1cm。底部付近はヘラ削りで調整し、底面は直徑約2.5cmのゆるやかな平坦面を成す。胴部は最大径7.4cm。横ナデ調整を施し、肩部にカーブの変換点がある。口縁部は、横と上に三角状に張り出す。A-1区。	
10-6	古墳 中期	須恵土 器	口径12.4cm、器高5.05cm。口縁部はノミ刃状。天井部は狭い範囲で回転ヘラ削りを施す。出雲I期。A-5区。	
10-7	古墳 中期	須恵土 器	口径10.6cm、拡張部高さ2.1cm、蓋受部径13.3cm。口縫部やくぼむ。出雲I期。A-5区。	
10-8	古墳	須恵土 器	口径12.8cm、推定高5.55cm。半焼けで橙色を呈する。口縁部に沈線を入れる。出雲I期。A-6区。	

拂園 番号	時代	器種	調整・手法の特徴等の説明と出土箇所
10-9	古墳	須恵器 环	口径10.8cm、器高4.6cm。口縁端部は丸く仕上げ底部は回転ヘラ削り調整を施す。A-5区。
10-10	古墳	土師器 高	頸部の直径2.6cm、坏部内面はヘラなどで、外面は刷毛目調整、脚部内面は上方に絞り痕、下方にヨコ方向のヘラ削りを施す。A-5区。
10-11	古墳	須恵器 环	底径11.4cmを削り、脚端部は下方へ突出し、外面に凹線でするべく縦をつける。出雲1期。A-6区。
10-12	古墳	須恵器・壺	口径11.8cm、器高3.5cm。天井部は無調整で1本線のヘラ記号あり。出雲5期。A-2西柱中。
10-13	古墳	須恵器・壺	口縁部は上ドへ鉗張され、口唇部は垂直に近い。2段の鋭利な小窓の下方に波状文を付ける。A-6区。
10-14	奈良	須恵器 長 壺	下部半である。脚部最大径15cm、高台径9.8cm、底外面は静止糸切りによる切離し。底部に焼き歪みあり。A-5区。
10-15	古墳	須恵器 人	口径39.8cm。口縁部は下方へ三角状に肥厚する。波状文を施す。A-5区。
10-16	绳文	磨製石斧	残存長10.7cm、刃部側最大幅6.2cm、最大刃厚4.2cm。刃部に向かって横幅が広がる。A-2区出土。
B区出土遺物 調査表			
11-1	绳文	深鉢	(外)すり消し绳文(内)条痕 B-1区。
11-2	绳文	深鉢	(外)すり消し绳文(内)ナデ B-2区。
11-3	绳文	浅鉢	(外)すり消し绳文(内)ナデ B-2区。
11-4	绳文	鉢	(外)条痕ナデ(内)条痕山形口縁か。口縁部はやや肥厚する。B-1区。
11-5	绳文	鉢	(外)下部を肥厚させ棒状工具による押圧文をタテ方向に付ける。(内)ナデ B-1区。
11-6	绳文	鉢	(外)すり消し绳文(内)ナデ B-1区。
11-7	绳文	深鉢	(外)沈底上部にすり消し绳文をつける(内)ナデ B-3区。
11-8	弥生	甕又は壺	底部。底端部は外方へ肥厚し、底部は2ミリ程度上げ底となる。B-1区。
11-9	弥生	甕又は壺	底径10.2cm。B-2区。
11-10	绳文	浅鉢	(外)ナデ(内)条痕 B-1区。
11-11	绳文	浅鉢	内外面共にヨコ方向の条痕地で直径4ミリの円孔を穿つ。B-2区。
11-12	弥生 中期	大型広口壺	口縁部が朝顔型に大きく外方へ開いて、端部が肥厚して外側に平坦面を成す。口径32.3cm、頂部に向かって厚みは1.25cm。口縁部上面と端部に飾溝の2条単位の平行沈線文を施す。出雲越岐IV-1様式。B-5区。
11-13	弥生 中期	甕又は壺	頂部の破片で幅1cm前後の粘土帯を張り付け、押圧し、凹凸を表現したもの。B-5区。
11-14	弥生	甕又は壺	底部、徑5.4cm。B-5区。
11-15	弥生 中期	壺	1.口縁部がラッパ状に外方へ開く壺の口縁部である。口径18cm、5段の三角状突帯を付け、その上にたて方向に縦3~4ミリの2条単位の粘土縫を約4cm間隔ではりつけている。B-5区。同・個体の破片はSK13上部部でも発見されている。淡灰色。出雲・越岐III-1又は2様式。
11-16	弥生	高坏	脚部最小径4.2cm。上部に坏部粘土貼り付け抜、その下部に絞り痕あり。B-1区。
11-17	弥生	壺	底径11.4cm、内外側共にヘラでたて方向に調整するもの。B-1区。
11-18	弥生 中期	壺	口径18.4cm、口縁部は比較的ゆるい断面「く」字状に屈折する。薄紗粒を多量に含む。淡黄灰色。出雲・越岐III-1様式。B-5区。
11-19	弥生 中期	壺	口径22.8cm、口縁部がラッパ状に開き、端部は上方へ断面三角形に肥厚する。出雲・越岐III-2様式。B-1区。
11-20	弥生 中期	甕又は鉢	口縫部底面の部分。上部に大きな欠壊があり、先端に刻目文、上面は幅1.7cmあり、2条単位の斜格子文を付ける。下部は5段以上の先端に想文文を付ける突帯あり。さらに幅1~5ミリの粘土縫を直角方向に貼り付ける。出雲越岐III-2様式並行か。上部突帯の直径33.8cmを測る。
12-1	古墳 奈良	須恵器 土	前脚か。脚部直徑約2.5cm、長さ約5.8cm。平均5mmの幅の短い面取りを施し、脚端部付近は斜め内側にヘラ削りし約1cmほどの平らな傾斜面をつくる。B-5区。
12-2	古墳 奈良	須恵器 大型土馬	尻から後脚にかけての被膜片である。高さ9.4cm残存長7cmを測る。背中に直徑2ミリ程度の竹管文を斜めに交叉させ施す。B-5区。
12-3	古墳 奈良	須恵器 馬	胴体部分の被膜片である。残存高5.8cm、残存長5.6cm。腹部と尻部に直徑3ミリ程度の竹管文を3箇所施す。B-5区。
12-4	绳文	磨製石斧	乳棒状で刃部と基部先端を欠く。残存長10.4cm、幅4.7cm、厚み3.3cm、閃綠岩系。B-1区。
12-5	绳文	打製石斧	長さ7.7cm、刃部最大幅5.2cm、厚み1.8cm。黒色玄武岩系。B-2区。
12-6	弥生	石器未製品	長7.1cm、幅3.15cm、厚み0.9cm。黒色玄武岩質。B-4区。
12-7	古墳	土師質錐	長5cm、幅3.4cm、厚み3.3cm。直径8~9ミリのV孔あり。B-2区。

拂図番号	時代	器種	調整・手法の特徴等の説明と出土箇所
12-8	中世 以降	瓦 質 鍵	長4cm、幅1.4cm。直径3~4ミリの円孔あり。B-4区。
12-9	中世 以降	瓦 質 鍵	長4.3cm、幅2.5cm。直径1.1×1.3cmの円孔あり。B-4区。
12-10	不明	石 鉢	黒曜石製、長さ0.9cm、底部幅0.95cm、厚み2ミリ。
13-1	古墳 前期	古式土師壺	複合口縁部分で口径12.4cm。内外に横ナデ調整。外側にススが付着する。B-5区。
13-2	古墳 前期	古式土師壺	複合口縁。突出部の直徑21cm。頸部には櫛状工具による羽状文を施す。B-5区。
13-3	古墳 前期	古式土師壺	複合口縁。口径15.8cm。外側全体にススが付着する。B-1区。
13-4	古墳	土師壺	口径17cm、やや退化した複合口縁で頸部付近斜め方向の櫛目調整の後、横ナデを施す。B-3区。
13-5	古墳 中期	土師壺	壺部の破片。内面に放射状の略文あり。突帯下部は著しく内側へ入り込む。B-1区。
13-6	奈良 高台付	須恵器	高台径9.4cm。B-2区。

C 区 出土遺物観察表

13-7	古墳 奈良 土	須恵器 馬	馬頭の破片である。高さ1.8cm、直径1.9cm。接地面は約1cmの平坦面を成す。C-5区。
13-8	古墳 奈良 土	須恵器 馬	頭から首にかけての破片である。残存高4cm、長さ5.5cm。目、鼻、口、たてがみを表現する。C-5区。
13-9	古墳	須恵器 土	高さ2.2cm、下部直径2.85cm。直径7ミリの円孔を穿つ。C-5区。
13-10	縄文	擦石	平面8.3×8.7cm、厚み5.7cm。断面は台形状だが下部も打ち欠いている。鶴部は多角形に加工している。上部はあまり平滑ではない。閃綠岩系の石。C-5区。
13-11	古墳	土師質 土	直徑3.3cm、厚み准定2.5cm。中心部に直徑5~6ミリの円孔を穿つ。C-2区。
13-12	古墳	土師質 土	長2.8cm、厚み2.7cm。直径6~6.5ミリの円孔あり。C-2区。

その他、出土地不明 出土遺物観察表

13-13	古墳 奈良 土	須恵器 馬	直徑2.3×2.5のやや楕円形で長さ7.2cm、タテ方向に面取りを施し直徑約0.7cmの平らな接地面をつくる。上部のかづびの具合から尻部に繰く後脚であろう。
13-14	古墳 奈良 土	須恵器 馬	直徑約2.4cm、長さ約4.3cm。タテ方向に面取りを施し直徑約1.2cmの平らな接地面をつくる。
13-15	不明	石 鉢	長さ11.5×12cm、厚み2.3cmの河原石の両端を打ち欠く。淡灰色。安山岩系。
13-16	縄文	擦石	長さ10.1×6.3×厚み4.6cm。
13-17	縄文	擦石	平面10.4×6.1cm、厚み3.8cm。画面中央部が平滑である。側面は不使用。

S K 01 出土遺物観察表

32-1	縄文	漆鉢	底部、底径9.6cm。
32-2	縄文	鉢	口縁部。SK01前下唇。(外)3~4条単位の曲線文。(内)ヨコ方向の条痕。
32-3	縄文	石皿	長さ17.5×11.4cm、厚み4.2cm。(外)一部に淡黄色の粉状の付着物あり。
32-4	縄文	石皿	長さ26.6×16.7cm、厚み11.3cm。画面にくぼみあり。最大1cmと3.7cmくぼむ。
32-5	縄文	木製品B	長さ71cm、幅36.5cm、厚み6cm。材質はカシ類。貯蔵の際の覆い板として使われたものか。
32-6	縄文	木製品A	長さ69cm、幅33.5cm、厚み7~9cm。材質はカシ類。貯蔵の際の覆い板として使われたものか。

S K 02 出土遺物観察表

33-1	縄文	浅鉢	残存高15cm。(外)優美なすり消し縄文を受け、山形口縁で最大径24.9cm。上部に直徑4ミリ程度の細い円孔を2カ所穿つ。すり消し縄文は脣下半部にも及び非常に精緻丁寧な仕上げ。(内)「J」字なへら磨き調整。
33-2	縄文	深鉢	山形口縁の頂部。(外)すり消し部は、太い沈線で区画した内縁を粘土で盛り上げている。粘土帯は体溝に向けて高くなら下端部で3ミリの厚みを測る。(内)斜めナデ調整。
33-3	縄文	深鉢	(外)すり消し縄文。(内)ナデ。
33-4	縄文	深鉢	山形口縁となる。(外)すり消し縄文(内)へら磨き調整。
33-5	縄文	深鉢	(外)すり消し縄文。(内)ナデ。
33-6	縄文	深鉢	山形口縁となる。(外)すり消し縄文(内)条痕。
33-7	縄文	深鉢	口径19cmを測る。(外)すり消し縄文(内)ナデ。

拂因 番号	時代	器種	調整・手法の特徴等の説明と出土箇所
33-8	縄文	深鉢	か (外) 太い沈線で S字状文を描く。(内) ナデ深鉢の可能性もある。
33-9	縄文	深鉢	(外) 上部ですり消し縄文下部な。(内) 上部など下部条痕。
33-10	縄文	深鉢	(外) 条痕(内) 条痕。
33-11	縄文	深鉢	か (外) すり消し縄文。(内) ナデ。
33-12	縄文	深鉢	か 山形口縁部。最高部に棒状工具で 4 畠所のくぼみをつける。(外) すり消し縄文。(内) ヘラ磨き調整。
33-13	縄文	深鉢	か (外) ナア(内) ナデ。直徑 5ミリの円孔あり。第 3 層。
33-14	縄文	深鉢	口徑 17.8cm、残存高 10cm。(外) 条痕。(内) 上部条痕、下部条痕後なで調整。第 3 層
34-1	縄文	深鉢	山形 35.8cm を測る。内外面共にヨコ方向の条痕地である。
34-2	縄文	深鉢	内外面共にナデ調整。
34-3	縄文	深鉢	か (外) ナア(内) 条痕。
34-4	縄文	深鉢	内外面共にヨコ方向の条痕地である。
34-5	縄文	深鉢	内外面共にナデ調整。
34-6	縄文	深鉢	内外面共にナデ調整。
34-7	縄文	深鉢	か (外) 条痕(内) 条痕後ナデ調整。
34-8	縄文	深鉢	底部。底径 14.8cm。
34-9	縄文	深鉢	底部。底径 10.4cm。
35-1	縄文	肩製石斧	残存長 5cm、刃部幅 5.5cm、厚み 3.9cm。刃部先端が著しく崩れし刃部の機能を果たさない。二次的に別の用途に利爪されたのか。第 3 層。
35-2	縄文	敲石	石 10.6×8.6cm、厚み 5.7cm。西面共に平滑である。内側面は打ち欠いている。閃緑岩系の石。最下層。
35-3	縄文	石	長さ 23.2×11cm、厚み 4.6cm 平坦な面のはば全面を使用する。最下層。
S K 03 出土遺物 鋸 砥 補			
36-1	縄文	浅鉢	か (外) 口縁部はすり消し縄文その下にヨコ方向の線があり、下部はナデ。(内) ナデ。全体はボール形になる。上層部。
36-2	縄文	深鉢	鉢 山形口縁。(外) すり消し条文。(内) 条痕。
36-3	縄文	深鉢	か (外) すり消し縄文。(内) ヨコ方向の条痕。
36-4	縄文	深鉢	か (外) すり消し縄文。(内) 条痕。土壌上部。
36-5	縄文	深鉢	か (外) すり消し縄文。(内) ナデ。
36-6	縄文	不明	鉢 (外) 上方へ内傾する。結節縄文の上部に縄文末溝突度。沈線で平行線や波状文を描く。(内) ナデ。
36-7	縄文	深鉢	か (外) 縄文で文様を描く。(内) 条痕。
36-8	縄文	深鉢	か (外) 縄文。(内) 条痕 ボール形深鉢の可能性もあり。
36-9	縄文	深鉢	か (外) 5 条単位の曲線を描く。(内) ヨコ方向の堆い条痕。
36-10	縄文	不明	鉢 (外) 沈線で円文を描く。(内) ナデ。
36-11	縄文	深鉢	底径 10.8cm。(外) 底面直線上に幅 4ミリの凹線文あり。4 分割し上方にあがる。縄文一部残る。(内) ナデ。十層上部。
36-12	縄文	深鉢	鉢 内部面共にヨコ方向の条痕。
36-13	縄文	深鉢	鉢 口徑 28.4cm、内部面共にヨコ方向の条痕。
36-14	縄文	深鉢	鉢 口径 33.4cm、内部面共にヨコ方向の条痕。
36-15	縄文	深鉢	鉢 口徑 36.6cm、(外) ヘラナデ一部条痕。(内) ヘラナデ。
37-1	縄文	深鉢	鉢 上方へくの字に折れいく。外面面共に斜め方向の条痕地である。
37-2	縄文	深鉢	鉢 内外面共にヨコ→斜め方向の条痕地である。直徑 5 ミリの円孔を穿つ。
37-3	縄文	小型壺	てぐね土器で筒部に向か内傾する。L1 直径 5cm。推定器高 6.5cm。
37-4	縄文	深鉢	鉢 膜部最大部から底部付近までの破片で、長さ 10.9cm。内外面共に条痕。
37-5	縄文	深鉢	鉢 底部。底径 8cm。
37-6	縄文	深鉢	鉢 底部、底径 6cm。
37-7	縄文	深鉢	鉢 底部、底径 10cm。
37-8	縄文	深鉢	鉢 底部、底径 9.4cm。
37-9	縄文	深鉢	鉢 底部、底径 10cm。
37-10	縄文	深鉢	鉢 底部、底径 14.5cm。
37-11	縄文	深鉢	鉢 底部、底径 8cm。
37-12	縄文	深鉢	鉢 底部、底径 9cm。
37-13	縄文	深鉢	鉢 底部。
37-14	縄文	深鉢	鉢 底部、底径 9.3、残存高 12cm。
38-1	不明	石	鉢 平面 8.3×5.9cm、厚み 1.9cm。両側面を打ち欠く類。黒色玄武岩系の石。SK 03付近。
38-2	縄文	擦石	長さ 9.25×8.2×厚み 7.1cm。磨研美しい。第 2 層。閃緑岩系。
38-3	縄文	小型石斧	残存長 6.1cm、刃部幅 4.3cm、厚み 1.3cm。刃先を欠くが側面も研磨し、堅状工具の機能をもつと考えられる。黒色玄武岩系の石。SK 03付近。

SK 06 付近出土遺物観察表

拂岡 番号	時代	器種	調整・手法の特徴等の説明と出土箇所
39-1	縄文	磨製石斧	残存長7.5cm、刃部幅4.3cm、厚み2.9cm。断面は4面研磨され削張りの長方形である。SK 06上層から10cm南の堆山上。

SK 08 出土遺物観察表

40-1	縄文	鑿み石	12.1×10cm、厚み6.7cm。表裏面、側面の3カ所に中央部に打痕、1カ所に擦痕がある。
40-2	縄文	皿	残存長27cm、幅25.3cm、厚み8.8cm。表裏面共使用する。それぞれ最大1.6cmと1cmのくぼみ。
40-3	縄文	皿	残存長29cm、幅21.6cm、厚み8cm。表面はよく摩滅し、最大5ミリくぼむ。表面も磨耗しているがまだ平らである。
41-1	縄文	鉢	内外両面に斜め方向の条痕。
41-2	縄文	鉢	(内)ヨコ方向の条痕。(外)斜め方向の条痕。
41-3	縄文	鉢	内外両面に斜め方向の条痕である。
41-4	縄文	浅鉢	か底部、底径9cm、残存高7.3cm。
41-5	縄文	鉢	底部。
41-6	縄文	鉢	底部。
41-7	縄文	鉢	底部、底径11.4cm。
41-8	縄文	鉢	底部、底径7.5cm。
41-9	縄文	鉢	底部、底径8cm。
41-10	縄文	鉢	底部、底径9.6cm。
41-11	縄文	鉢	底部、底径9.6cm。
41-12	縄文	鉢	底部、底径10cm。
41-13	縄文	磨製石斧	残存長9.3cm、幅4.6cm、厚み3cm。4面共研磨する。暗緑色の火成岩系。
41-14	縄文	擦石	7.8×5.5×厚み4.5cm。
41-15	縄文	磨製石斧	基部。残存長4cm、幅4cm、厚み2.9cm。4面共によく研磨する。黒色玄武岩系。
42-1	縄文	深鉢	山形口縁。(外)すり消し縄文。口縁部上面にも縄文を付ける。(内)ナデ。
42-2	縄文	不明	山形口縁。(外)すり消し縄文。(内)ナデ。
42-3	縄文	不明	山形口縁。(外)すり消し縄文。(内)ナデ。
42-4	縄文	深鉢	山形口縁で口徑20.8cm、残存高14.6cm。(外)上部にすり消し縄文。口縁部上面にも縄文を付ける。(内)ナデ下部に削り。
42-5	縄文	鉢	(外)沈縄文。(内)ナデ。
42-6	縄文	鉢	(外)すり消し縄文、すり消し部には直径3.5ミリの列点文を付ける。(内)ナデ。
42-7	縄文	浅鉢	口径17.1cm。内外両面共にナデ調整を施す。
42-8	縄文	鉢	(外)ナデ後沈縄文。(内)条痕。
42-9	縄文	鉢	(外)3~4条単位の曲線文を描く。(内)ヨコ方向の条痕。
42-10	縄文	鉢	口徑33.6cm、内外両面共にナデ調整を施す。
42-11	縄文	鉢	山形口縁。(外)条痕。(内)ナデ調整。
42-12	縄文	鉢	口径44.3cm、内外両面共条痕。
42-13	縄文	鉢	内外両面に斜め方向の条痕地である。
42-14	縄文	鉢	内外両面に条痕地。焼成後に付けた4×5ミリの円孔あり。

SK 11 出土遺物観察表

43-1	縄文	鉢	口縁部。(外)条痕。(内)ナデ。
43-2	縄文	鉢	口縁部。(外)ナデ、(内)条痕。
43-3	縄文	深鉢	(外)すり消し縄文、(内)ヨコ方向の条痕。
43-4	縄文	深鉢	口徑26cm、内外両面共にナデ調整。下部削り。
43-5	縄文	深鉢	(外)ナデ下部に削り。
43-6	弥生	粘土壺	口縁部は外方へ三角状に肥厚し口徑16cm。口縁部から3.4cm下方で幅4~6ミリの段をもつ。口縁部にかけては内傾し内外両面共に灰色系でテラスを施し、突宍という縄文の要素と段という弥生の要素を併せ持つ複合式並行であろう。十輪上面出土。

SK 13 出土遺物観察表

43-8	縄文	深鉢	底部、底径11cm。1ミリほど上の上げ底となる。
------	----	----	--------------------------

SK 16 出土遺物観察表

44-1	縄文	石	黒曜石製、長さ1.2cm、基部幅0.95cm、厚み2ミリ。
44-2	縄文	石	長さ33.5cm、幅18.3cm、厚み8.5~10.5cm。中央部の頗磨耗しき。
44-3	縄文	石棒状石	長さ57cm、厚み24.9×19cm。椎円形に加工なし。

SK 19 出土遺物観察表

43-7	縄文	深鉢	(外)ナデ。(内)ナデ一部条痕。口縁部外面すす付着し、3cm下方に直徑5ミリの円孔あり。中層。
------	----	----	---

SK 22 出土遺物観察表

45-1	縄文	石棒状石	長さ37.1cm、厚み16.5×14.3cm。中央部2カ所に複数の打痕が集中する。貯藏穴内から出土したので二次的に重石に使用されたのかもしれない。
------	----	------	---

九日田遺跡出土木製品樹種鑑定調査報告書

1999年11月

島根大学総合理工学部
古 野 毅

九日田遺跡（松江市大井町字九日田、大井神社前の田園）から出土した加工板2点を含む10点の木材について光学顕微鏡による樹種鑑定を行った。それぞれの木材の解剖学的性質とそれに基づいて樹種を同定した結果を下記に記載する。また横断面（木口）、放射断面（柾目）および接線断面（板目）の光学顕微鏡写真を添付する（図版1～10）。

出土した木材のうち、考古学上最も重要なと思われる加工板は、縄文時代におけるドングリ貯蔵穴の重し用の蓋に使用されていたものである。地下水が流れているため保存状態はよく、2点ともほぼ同じ大きさで、横40cm、縦90cm、厚さ10cmの板状の加工品である。他の8点はドングリ貯蔵穴の近辺から出土した自然状態の立木である。

樹種鑑定結果によると、加工板はいずれもカシ類（コナラ属アカガシ亜属）であった。自然立木はカシ類3点、トチノキ2点、モミ、イヌマキ、クスノキが各1点であった。

ドングリ貯蔵穴の重し蓋に使われたカシ材は、その近辺に生育していたカシ立木から伐採して加工の上利用されたと考えられる。

No.1（加工板） コナラ属アカガシ亜属 [*Quercus (sub.Cyclobalanopsis)*] (ブナ科)

構成細胞は道管要素、周囲仮道管、木部纖維、軸方向柔細胞、放射柔細胞からなる。

年輪幅はかなり狭い。円形ないし稍円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は単せん孔である。道管にチロースがよく発達している。軸方向柔細胞は接線状に配列しているが、余り目立たない。放射組織は同性で、単列放射組織と極めて幅の広い広放射組織（複合型）がある。放射柔細胞に粒状の内容物が非常に多く目立つ。周囲仮道管が存在する。道管放射組織間壁孔は典型的な柵状を示す。

以上の組織的特徴からコナラ属アカガシ亜属（カシ類）と同定した。

No.2（加工板） コナラ属アカガシ亜属 [*Quercus (sub.Cyclobalanopsis)*] (ブナ科)

構成細胞は道管要素、周囲仮道管、木部纖維、軸方向柔細胞、放射柔細胞からなる。

円形ないし稍円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は単せん孔である。道管にチロースが認められる。軸方向柔細胞は接線方向に1～3細胞幅の帯状柔組織を形成している。放射組織は同性で、単列放射組織と極めて幅の広い広放射組織（複合型）がある。周囲仮道管が存在する。道管放射組織間壁孔は柵状を示す。

以上の組織的特徴からコナラ属アカガシ亜属（カシ類）と同定した。

No.3（自然立木）

モミ属 [*Abies sp.*] (マツ科)

構成細胞は仮道管と放射柔細胞の2種類である。

年輪幅は狭い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材幅はやや狭い。分野壁孔は不明瞭であるが、スギ型で1分野に2～4個存在する。放射柔細胞は厚壁であり、典型的なじゅず状末端壁をもっている。

以上の組織的特徴からモミ属と同定した。

No.4 (自然立木) イヌマキ [*Podocarpus macrophyllus* D.Don (マキ科)]

構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。

年輪幅はきわめて狭いものがある。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材幅は非常に狭い。樹脂細胞が非常に多く、年輪内にはほぼ均等に分布している。分野壁孔はヒノキ型で1分野に1~2個存在する。

以上の組織的特徴からイヌマキと同定した。

No.5 (自然立木) コナラ属アカガシ亜属 [*Quercus (sub.Cyclobalanopsis)* (ブナ科)]

構成細胞は道管要素、周囲仮道管、木部纖維、軸方向柔細胞、放射柔細胞からなる。

円形ないし稍円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は单せん孔である。ほとんどの道管にチロースが非常によく発達している。軸方向柔細胞は接線方向に1~2細胞幅の線状柔組織を形成しており目立つ。放射組織は同性で、單列放射組織と極めて幅の広い広放射組織(複合型)がある。周囲仮道管が存在する。道管放射組織間壁孔は典型的な櫛状を示す。

以上の組織的特徴からコナラ属アカガシ亜属(カシ類)と同定した。

No.6 (自然立木) コナラ属アカガシ亜属 [*Quercus (sub.Cyclobalanopsis)* (ブナ科)]

構成細胞は道管要素、周囲仮道管、木部纖維、軸方向柔細胞、放射柔細胞からなる。

円形ないし稍円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は单せん孔である。道管にチロースが認められる。軸方向柔細胞は接線方向に1(2)細胞幅の線状柔組織を形成し、非常に目立つ。放射組織は同性で、單列放射組織と極めて幅の広い広放射組織(複合型)がある。周囲仮道管が存在する。道管放射組織間壁孔は典型的な櫛状を示す。

以上の組織的特徴からコナラ属アカガシ亜属(カシ類)と同定した。

No.7 (自然立木) コナラ属アカガシ亜属 [*Quercus (sub.Cyclobalanopsis)* (ブナ科)]

構成細胞は道管要素、周囲仮道管、木部纖維、軸方向柔細胞、放射柔細胞からなる。

円形ないし稍円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は单せん孔である。道管にチロースが発達し、濃色の内容物を含んでいる。軸方向柔細胞は接線方向に1(2)細胞幅の線状柔組織を形成し、非常に目立つ。放射組織は同性で、單列放射組織と極めて幅の広い広放射組織(複合型)がある。周囲仮道管が存在する。道管放射組織間壁孔は典型的な櫛状を示す。

以上の組織的特徴からコナラ属アカガシ亜属(カシ類)と同定した。

No.8 (自然立木) クスノキ [*Cinnamomum camphora* Presl (クスノキ科)]

構成細胞は道管要素、木部纖維、軸方向柔細胞、放射柔細胞からなる。

中庸の道管が単独あるいは2～4個主に放射方向に複合して散射状に分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔で、道管相互壁孔は交互壁孔を示す。道管内にチロースがよく発達している。軸方向柔細胞は道管の周囲を厚いさや状に囲む周囲柔組織となっている。放射組織は異性で、1～3細胞幅である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状である。異形細胞である油細胞が軸方向柔組織と放射組織に認められ、特に前者で顕著である。

以上の組織的特徴からクスノキと同定した。

No.9 (自然立木)

トチノキ [*Aesculus turbinata* Blume (トチノキ科)]

年輪幅は非常に狭い。やや小さい道管が単独ないし2～4個放射方向に複合して散在状に分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔である。らせん肥厚が認められる。道管相互壁孔は交互壁孔を示す。道管内に内容物（着色物質）を含むものがある。放射組織は單列同性型で、10～15細胞高のものが層階状に配列している。道管放射組織管壁孔はふるい状を示す。軸方向柔細胞は1～2層のターミナル状である。

以上の組織的特徴からトチノキと同定した。

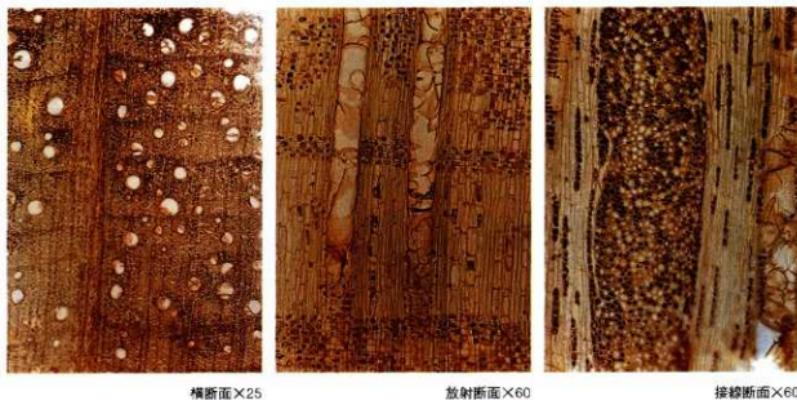
No.10 (自然立木)

トチノキ [*Aesculus turbinata* Blume (トチノキ科)]

年輪幅は狭い。やや小さい道管が単独ないし2～5個放射方向に複合して散在状に分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔である。らせん肥厚が認められる。道管相互壁孔は交互壁孔を示す。道管内に内容物（着色物質）を含むものが多い。放射組織は単列同性型で、10～15細胞高のものが層階状に配列し、顕著である。道管放射組織管壁孔は明瞭なふるい状を示す。軸方向柔細胞は1～2層のターミナル状である。

以上の組織的特徴からトチノキと同定した。

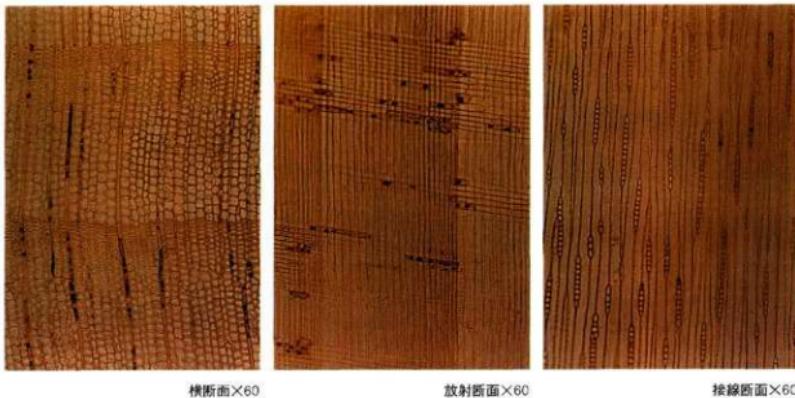
No1. (加工板) アカガシ亜属



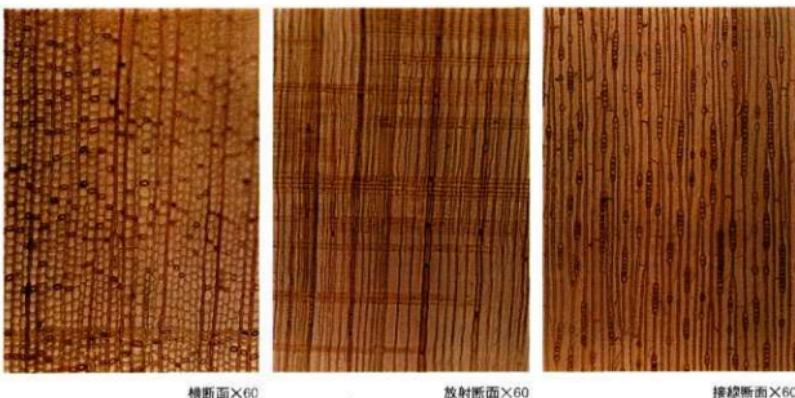
No2. (加工板) アカガシ亜属



No3. (自然立木) モミ属



No4. (自然立木) イヌマキ



No5. (自然立木) アカガシ亜属



横断面×25

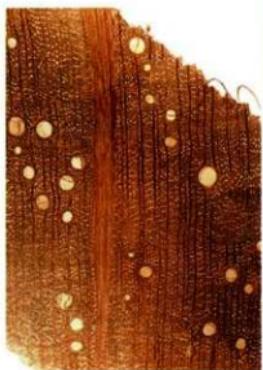


放射断面×60



接線断面×60

No6. (自然立木) アカガシ亜属



横断面×25



放射断面×60



接線断面×60

No7. (自然立木) アカガシ亜属



横断面×25

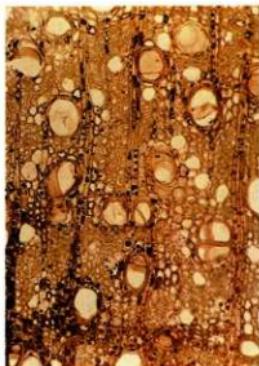


放射断面×60



接線断面×60

No8. (自然立木) クスノキ



横断面×60



放射断面×60



接線断面×60

No9. (自然立木) トチノキ



横断面×60

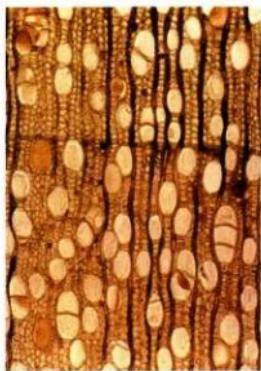


放射断面×60



接線断面×60

No10. (自然立木) トチノキ



横断面×60



放射断面×60



接線断面×60

写 真 図 版



九日田遺跡周辺航空写真



調査箇所全景
南側（山巻古墳所
在丘陵上）から見
る



調査箇所全景
大井神社北側斜面
から見る



調査箇所全景
西側から見る

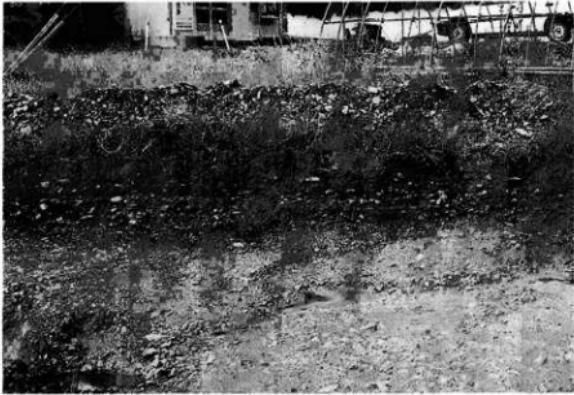
調査箇所全景
市道北側から見る



貯蔵穴群近景
南から



堆積土層断面
西側





堆積土層断面
SK02付近



SK01
ドングリの採取作業



SK01
石皿片出土状況

SK01
木枝片出土状況



SK01
木板と縄文土器出
土状況



SK01
下部木板出土状況





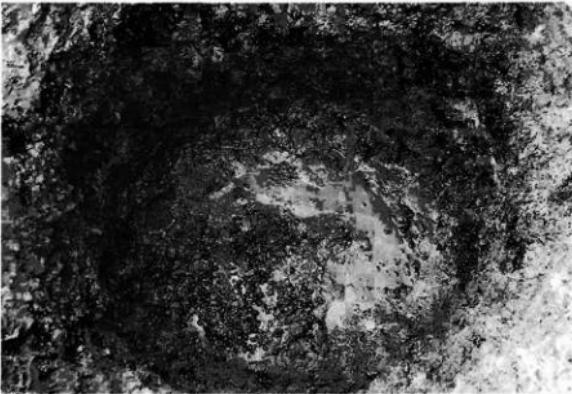
SK02
石出土状況

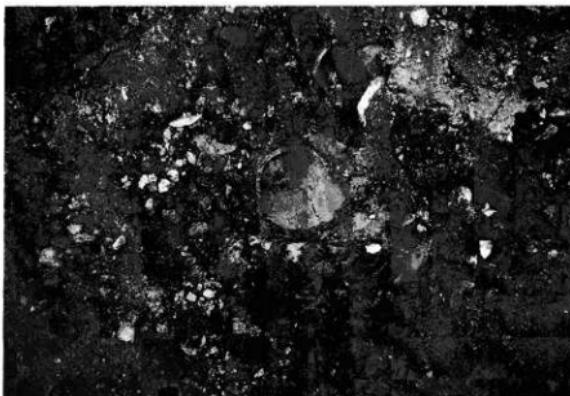


SK02底部付近
磨石、縄文土器出
土状況

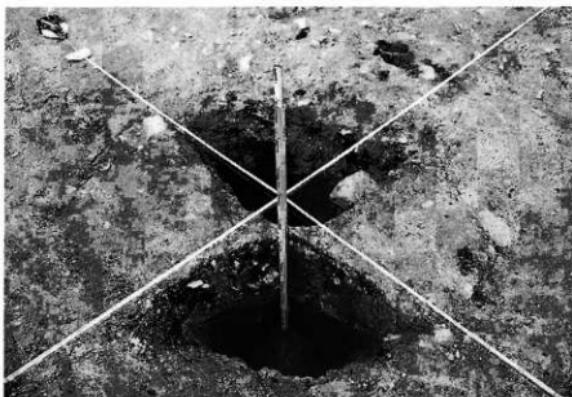


SK02
ドングリ出土状況





SK03
縄文土器出土状況

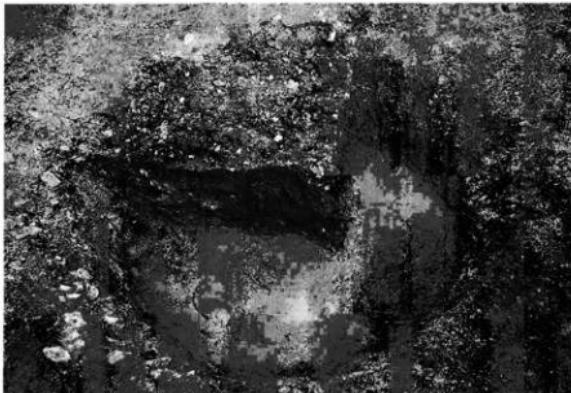


SK03
調査中



SK03
大石出土状況

SK04
堆積土の状況



SK04
全景



SK05
全景





SK06
全景



SK07
全景



SK08
大石出土状况

SK08

大石、縄文土器出
土状况



SK08

全景



SK09

全景

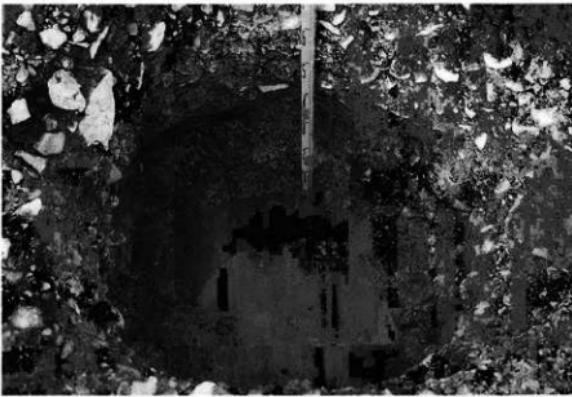




SK09(手前)と
SK11全景



SK11
全景



SK10
全景

SK12
全景

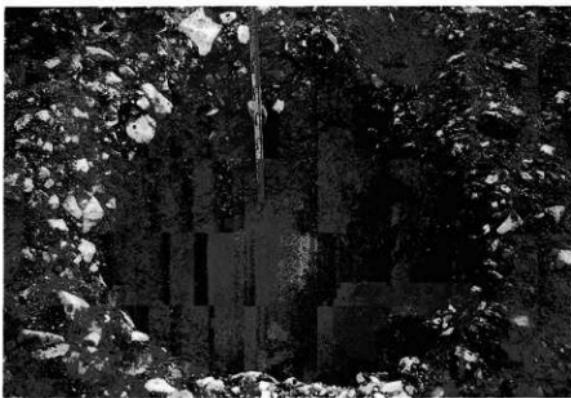


SK13
全景



SK14
大石と樹木出土状
況





SK14
全景

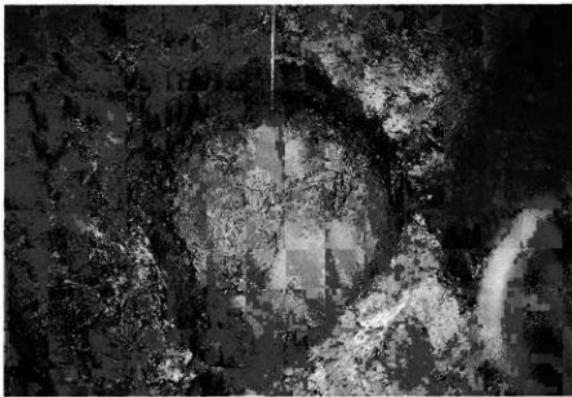


SK15
全景



SK16
全景

SK17
全景



SK18
全景

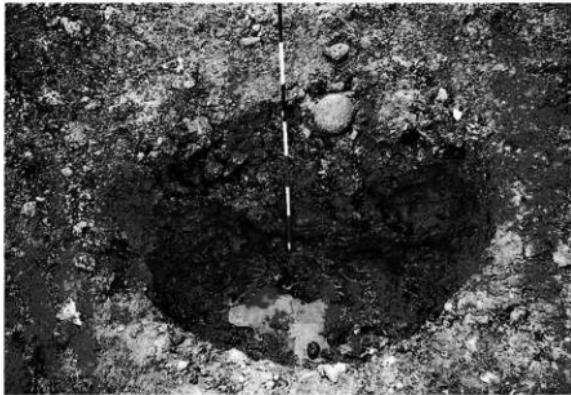


SK19
全景

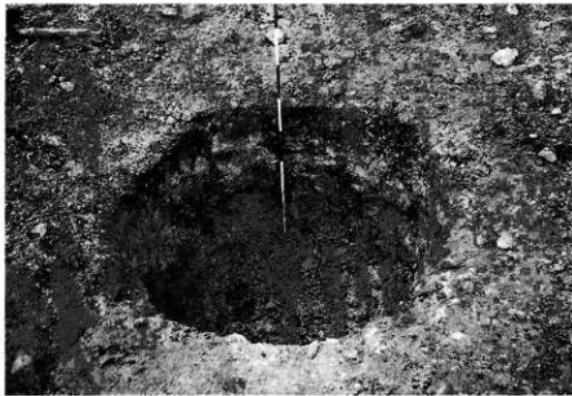




SK20
堆積土断面



SK21
堆積土断面と磨石
出土状況

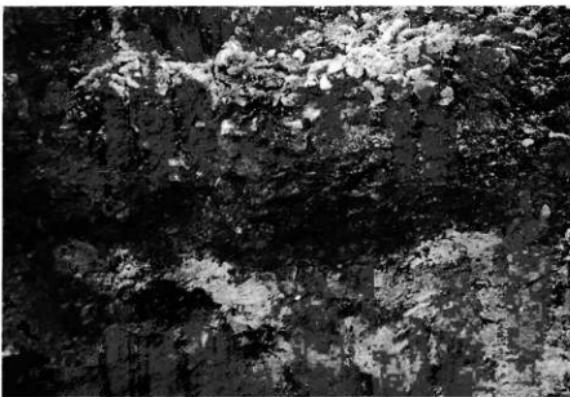


SK21
全景

SK22
全景



SK23
壁断面の状況



樹木の出土状況

